中久世遺跡発掘調査報告書

２０１９

株式会社　文化財サービス

例　言

1　本書は、京都市南区久世殿城町70番地で実施した、中久世遺跡の発掘調査成果報告書である。
（京都市番号　18S519）

2　調査は、共同住宅建設に伴い実施した。

3　現地調査は、開発事業者より株式会社文化財サービス（以下、「文化財サービス」という）に委託され、辰巳陽一（文化財サービス）が担当した。

4　調査期間は平成30年12月３日～12月28日である。

5　調査面積は319㎡である。

6　本文・図中の方位・座標は世界測地系による。標高はＴ.Ｐ.（東京湾平均海面高度）である。

7　土層名および出土遺物の色調は、農林水産省水産技術会議事務局監修『新版標準土色帖』に準じた。

8　本書の執筆は辰巳が行い、編集は辰巳、野地ますみ（文化財サービス）が行った。

9　現地での記録写真撮影は辰巳が行い、出土遺物の撮影は西 絢香（文化財サービス）が行った。

10　調査に係る資料は京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課が保管している。

11　発掘調査および整理作業の参加者は、下記の通りである。
〔発掘調査〕　田邊貴教、望月麻佑、田中慎一、小林一浩、吉岡創平（以上、文財財サービス）、作業員（株式会社京カンリ）
〔整理作業〕　田邊貴教、米倉美穂、多賀摩耶、吉川絵里、古谷眞由美、野地ますみ、植村明男、上野恵己、本間愛子、内牧明彦、大谷 弘（以上、文化財サービス）

12　自然科学分析（樹種同定）については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。

13　現地調査、整理作業において、下記の方から御教示をいただいた。記して感謝いたします。
（敬称略）
國下多美樹（龍谷大学）、浜中邦弘、若林邦彦（以上、同志社大学歴史資料館）

目　次

第Ⅰ章　調査の経緯
　1　調査に至る経緯…… 1
　2　調査の経過…… 1
　3　測量基準点の設置と地区割り…… 2
　4　整理作業・報告書作成…… 2

第Ⅱ章　位置と環境
　1　位置と環境…… 2
　2　既往の調査…… 5

第Ⅲ章　調査成果
　1　基本層序…… 8
　2　検出遺構…… 8
　（1）長岡京期～平安時代…… 11
　（2）古墳時代…… 18
　（3）弥生時代…… 19
　3　出土遺物
　（1）長岡京期～平安時代…… 26
　（2）古墳時代…… 29
　（3）弥生時代…… 29

第Ⅳ章　まとめ…… 30

附章　自然科学分析
　中久世遺跡出土鉄斧の柄の樹種同定…… 34

図版目次

図版１	遺構	１．調査区全景（北東から）	２．井戸0277枠検出状況（東から）
図版２	遺構	１．掘立柱建物１（北東から）	２．溝0263完掘状況（東から）
図版３	遺構	１．掘立柱建物３（北東から）	２．方形周溝墓１（北東から）
図版４	遺構	１．方形周溝墓２（東から）	２．方形周溝墓３（北東から）
図版５	遺構	１．方形周溝墓４（東から）	２．土坑0104遺物出土状況（南から）
図版６	遺物	１．井戸0277出土遺物	２．井戸0277出土　墨書土器1
		３．井戸0277出土　墨書土器2	４．井戸0277出土　緑釉陶器素地椀
		５．井戸0277出土　風字硯	

図版７　遺物　１．0277出土　鉄斧　　　　　２．方形周溝墓2出土　石包丁
３．土坑0104出土　弥生土器　４．方形周溝墓1・2、土坑0270出土　弥生土器

挿図目次

図１　調査位置図（1：2,500）…… 1
図２　調査経過 …… 3
図３　基準点配置、地区割り図（1：200）…… 4
図４　調査地周辺遺跡、既往調査位置図（1：5,000）…… 6
図５　調査区北壁土層断面図（1：50）…… 8
図６　調査区東壁土層断面図（1：50）…… 9
図７　調査区全体平面図（1：150）…… 10
図８　調査区全体平面図（長岡京期～平安時代）（1：150）…… 12
図９　井戸0159、0277平立断面図（1：50）…… 13
図10　掘立柱建物１平断面図（1：50）…… 14
図11　掘立柱建物２平断面図（1：50）…… 15
図12　調査区全体平面図（古墳時代）（1：150）…… 16
図13　溝0263平面図（1：50）…… 17
図14　掘立柱建物３平断面図（1：50）…… 18
図15　調査区全体平面図（弥生時代）（1：150）…… 20
図16　方形周溝墓１平断面図（1：50）…… 21
図17　方形周溝墓２平断面図（1：50）…… 22
図18　方形周溝墓３平断面図（1：50）…… 23
図19　方形周溝墓４平断面図（1：50）…… 24
図20　土坑0104遺物出土状況図、断面図（1：20）…… 25
図21　遺物実測図（1：4）…… 27
図22　調査地周辺流路復元図（1：5000）…… 32
図23　１a：小口　１b：柾目　１c：板目　スケールは100μm …… 35

表目次

表１　遺構概要表 …… 11
表２　遺物概要表 …… 26
表３　遺物観察表 …… 33

第Ⅰ章　調査の経緯

1　調査に至る経緯

京都市南区久世殿城町70番地において、共同住宅建設が計画された（図1）。建設予定地は中久世遺跡の範囲内に当たる。そのため、建築工事に先立ち、京都市文化市民局文化芸術都市推進室文化財保護課（以下、「文化財保護課」という）により試掘調査が実施された。その結果、弥生時代～中世の遺構、および遺物の存在が確認されたため、発掘調査を実施することとなった。発掘調査は、開発事業者から文化財サービスに委託された。

2　調査の経過

発掘調査は12月3日から現地作業に着手し、12月28日にて全ての工程を完了した。調査区は、文化財保護課の指導により東西11m、南北29m、面積は319㎡に設定した。調査地の現状は、駐車場であることからアスファルト舗装がなされており、その撤去後に掘削を開始した。試掘調査で、アスファルト下の近現代整地土および近代耕作土直下で弥生時代～中世の遺構、遺物が確認されていることから、上記近代耕作土より上層を重機掘削によって除去した。その後、人力によって遺構面の精査および遺構検出を行った。その結果、弥生時代、古墳時代、平安時代の遺構にくわえ中世の耕作溝を検出した。これらについては人力にて掘削を行い、適宜写真撮影および図面作成による記録作業を実施した。写真撮影機材は、35mmフルサイズの一眼レフデジタルカメラ、35mm白黒フィルムおよびカラーリバーサルフィルムを使用し、図面作成には手測りによる実測、トータルステーションによる図化、写真測量を併用した。遺構掘削、記録作業が完了した後、資機材の撤収を行い、現地作業を終了した（図2）。

図1　調査位置図（1：2,500）

現地調査においては、適宜、文化財保護課の臨検および指導を受けた。また、遺構検出段階および掘削段階において、本調査の検証委員である龍谷大学教授國下多美樹氏、同志社大学歴史資料館准教授浜中邦弘氏の現地視察・検証を受け、調査に対する助言をいただいた。

３　測量基準点の設置と地区割り

測量基準点は、VRS 測量により調査地敷地内にＴ．１、Ｔ．２を設置し、その２点からトータルステーションによりＴ．３を設置した。基準点測量の成果は以下の通りである。

Ｔ．１	X = -115674.054 m	Y = -26019.947 m	H = 17.190 m
Ｔ．２	X = -115697.636 m	Y = -26020.819 m	H = 17.096 m
Ｔ．３	X = -115703.629 m	Y = -26034.088 m	H = 17.037 m

検出遺構および出土遺物の管理のため、調査区に対して世界測地系に基づき３m四方のグリッドを設定した。Y軸にアルファベットを西から東に、X軸にアラビア数字を北から南に順に付し、両者の組み合わせで地区名とした。地区名は、グリッドの北西角を基準とした（図３）。

４　整理作業・報告書作成

現地調査終了後、整理作業および報告書作成を行った。整理作業は写真、図面の整理と出土遺物の整理を並行して実施した。遺物の整理は洗浄、接合、実測、トレース、復元、写真撮影を行った。報告書の執筆は調査を担当した辰巳陽一、編集作業は野地ますみが担当し、その他整理作業は当社社員が分担して行った。

第Ⅱ章　位置と環境

１　位置と環境

調査地は京都市南区の南西部に位置する久世殿城町にあり、桂川から西に約 1.0km の地点に位置する。桂川右岸地域は、南部が大阪湾から瀬戸内海の海上ルートに直結し、北部は丹波・丹後に通じる山陰道の起点に位置するなど、交通の要衝となっている。調査地の南方には長岡京が建設され、平安時代には桂川以東が平安京域となり、桂川の渡河地点となる。当該地域では、向日丘陵や乙訓丘陵の縁辺部に大枝遺跡、今里遺跡、下海印寺遺跡などの旧石器時代から縄文時代にかけての集落遺跡が点在する。これら縄文時代後期から晩期の集落が母体となって弥生時代前期前半頃から京都盆地で開始された稲作技術が普及し、中久世遺跡などの弥生時代に属する集落を成立させた。弥生時代中期から後期には周辺に拡大発展し、調査地周辺では上久世遺跡、大藪遺跡、東土川遺跡などが形成される。これら拠点集落の多くは古墳時代にも引き継がれる。平安時代には久世荘、鎌倉時代から室町時代には下久世荘が営まれ、調査地の南東約 200 m地点には中世居館である下久世城跡が推定されている。近世には北約 80 mを西国街道が通る。

１．調査前（南から）

２．アスファルト撤去（西から）

３．重機掘削（南西から）

４．遺構検出作業（南東から）

５．遺構掘削作業１（北東から）

６．遺構掘削作業２（北西から）

７．TS測量作業（南西から）

８．調査完了後（北西から）

図２　調査経過

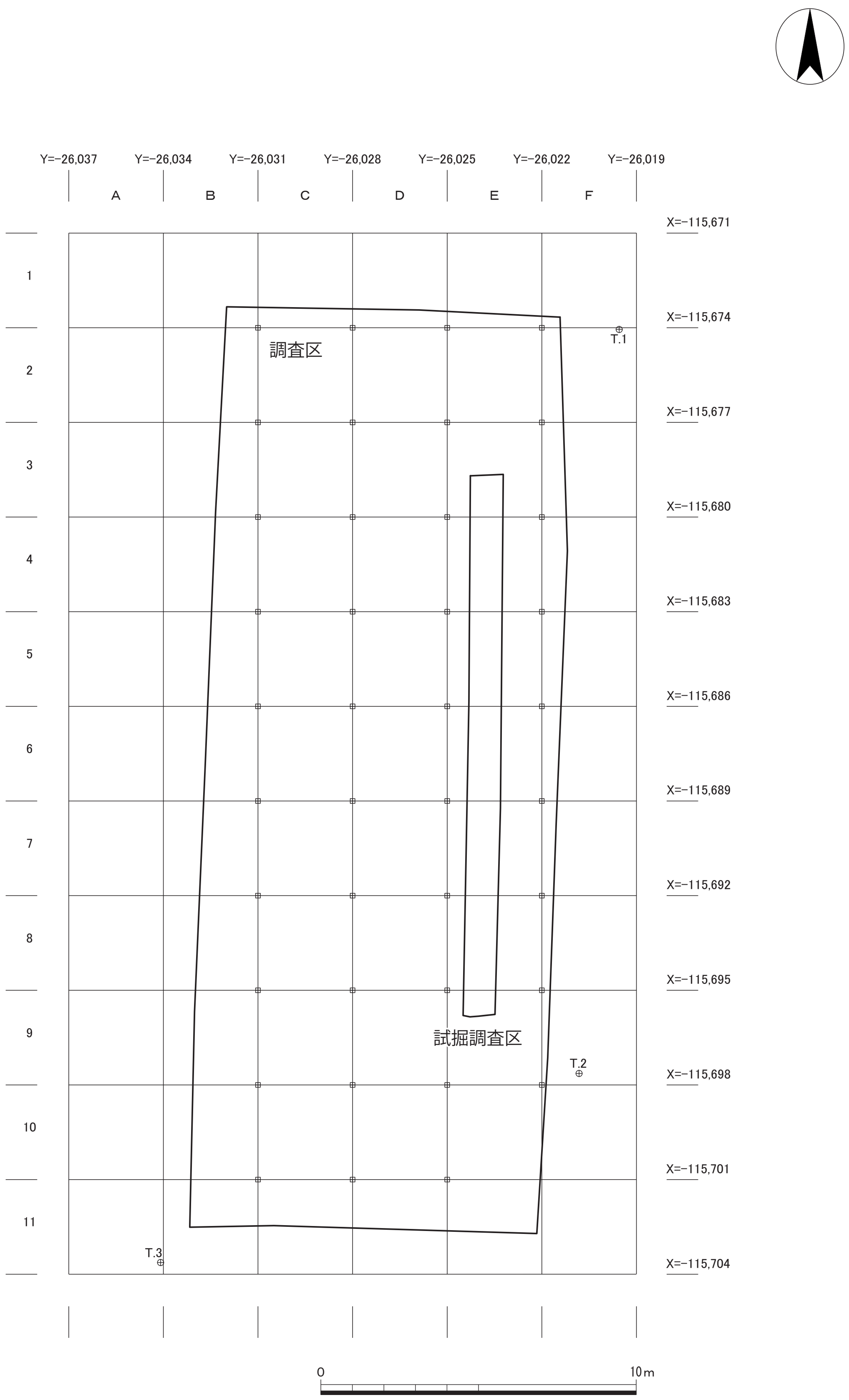


図３　基準点配置、地区割り図（1：200）

２　既往の調査（図４）

昭和 52 年度の大藪小学校内での調査では中近世の耕作溝、弥生時代中期の方形周溝墓１基が検出された[(1)]。同年度に今回調査地から北東に約 170 mの地点で実施された京都中央信用金庫久世支店新築工事に伴う発掘調査では、弥生時代および長岡京期から平安時代初期の流路が検出されている。弥生時代の流路からは縄文土器、弥生土器、石包丁など石製品、鋤などの木製品、長岡京期から平安時代初期の流路からは墨書人面土器、須恵器、木製人形代、斎串、獣骨など、祭祀関連遺物が多数出土しており、近隣で祭祀を行っていたことが明らかになった[(2)]。

昭和 54 年度には今回調査地から南西約 120 m地点で宅地造成工事に伴い発掘調査が行われている。当該調査では弥生時代中期の流路にくわえて方形周溝墓２基が検出されている。また、平安時代初期の掘立柱建物群と井戸、鎌倉時代までの建物、井戸、溝、土坑を検出している[(3)]。

昭和 58 年度には今回調査地から北東約 130 m地点で発掘調査が実施され、幅 5.0 mの規模を有する弥生時代の溝、平安時代の溝、井戸などが検出されている。弥生時代の溝からは多量の弥生土器が出土し、集落の区画に関わる遺構であるとされた[(4)]。

昭和 59 年度には北東約 220 m地点で実施された発掘調査では、流路３条が検出され、弥生時代から鎌倉時代の遺物が出土している[(5)]。

昭和 61 年度には２地点で発掘調査が実施されている。今回調査地から北西約 330 mの地点での調査では、弥生時代中期から古墳時代初頭の溝を検出し、集落の周囲を巡る水路としての用途が想定されている[(6)]。京都銀行久世支店建設に伴って調査が行われた、北東約 170 mの地点では、弥生時代の流路を検出し、弥生時代中期から後期の土器が出土している[(7)]。

昭和 63 年度には、北東約 240 mの地点で弥生時代から長岡京期にかけて機能した自然流路が検出され、墨書土器など祭祀に係わる遺物が出土している[(8)]。

平成元年度には、北西約 280 mの地点で弥生時代から古墳時代の竪穴住居４棟、奈良時代中期から後期の掘立柱建物３棟、柵２列などからなる建物群が検出されている[(9)]。

平成 11 年度には北西約 270 mの地点で弥生時代の方形周溝墓１基、古墳時代の竪穴住居１棟、飛鳥時代から奈良時代の掘立柱建物３棟、柵２列、平安時代の井戸２基などが検出された[(10)]。

北東約 360 m地点で平成 18 年度に実施された調査では、弥生時代の方形周溝墓２基、平安時代の土坑２基、室町時代遺構の掘立柱建物１棟が検出されている[(11)]。

また、昭和 62 年度には久世殿城町、大藪町一帯で実施された公共下水道工事に伴う立会調査が実施された。当該調査では弥生時代から存続し、平安時代末期に埋没する流路が確認されている[(12)]。

以上のように、既往の調査から、中久世遺跡の中央部から南西部にかけて数条の流路が北西から南東方向に向かって流れ、大藪遺跡内に位置する久世中学校付近で合流して南下する状況が復元される。同時に、これら流路間の平地に集落が形成されたと考えられる。

図４　調査地周辺遺跡、既往調査位置図（1：5,000）

註

（１）百瀬正恒 「中久世遺跡１」『昭和 52 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　2011 年
（２）久世康博ほか 「中久世遺跡２」『昭和 52 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　2011 年
（３）辻 裕司 「中久世遺跡」『昭和 54 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　2012 年
（４）木下保明ほか 「中久世遺跡」『昭和 58 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　1985 年
（５）吉村正親 「中久世遺跡」『昭和 59 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　1987 年
（６）上村和直 「中久世遺跡１」『昭和 61 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　1989 年
（７）上村和直 「中久世遺跡２」『昭和 61 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　1989 年
（８）西大條哲ほか 「中久世遺跡」『昭和 63 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　1993 年
（９）吉崎 伸 「中久世遺跡」『平成元年　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　1994 年
（10）出口 勲 「中久世遺跡」『平成 11 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　2002 年
（11）平田 泰・能芝 勉 「中久世遺跡・大藪遺跡」『京都市埋蔵文化財研究所発掘調査報告　2006-19』 財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　2007 年
（12）吉崎 伸 「大藪遺跡・中久世遺跡」『昭和 62 年度　京都市埋蔵文化財調査概要』 財団法人　京都市埋蔵文化財研究所　1991 年

第Ⅲ章　調査成果

1　基本層序

調査地の現地形は北から南に向かって下がっており、地表面の標高は、調査区北東角付近に設置した基準点Ｔ．1で 17.190 m、南東角付近に設置したＴ．2で 17.037 mである。直近では駐車場として使用されており、調査着手時にはアスファルト舗装が残されていた。したがって、現地表から 0.03 m～ 0.04 mまではアスファルトである。その直下には、小～極大礫を多量に含む 10YR6/6 明黄褐色粗粒砂からなる、上記舗装に伴うと思われる近現代整地土が層厚 0.56 m～ 0.6 mにわたって入れられている。当該整地土下には 5B5/1 青灰色細粒砂からなる近代耕作土層が堆積しており、層厚は 0.12m ～ 0.18 mである。この近代耕作土を除去すると 10YR5/6 黄褐色シルトからなる基盤層に達し、弥生時代から中世までの遺構を確認することができた。調査は、上記耕作土層までを重機掘削によって除去し、基盤層直上を遺構面として実施した（図５、６）。

2　検出遺構

基盤層直上にて遺構検出作業を行い、長岡京期～平安時代初期の井戸、掘立柱建物、土坑、ピット、古墳時代の溝、掘立柱建物、弥生時代の方形周溝墓、土坑、時期不明のピットを多数検出した。なお、建物に伴うピットは柱穴とした。これら以外に幅0.1 m～ 0.4 mの極浅い南北方向に走る溝を十数条検出した。これらの溝は上記の遺構群を切っていることにくわえ、検出面直上に近代耕作土層が堆積することから、中世～近世の耕作溝と考えられる（図７）。調査は中世～近世の耕作溝を掘削後、平安時代～古墳時代と弥生時代の遺構についてそれぞれ掘削および記録をおこなった。

図５　調査区北壁土層断面図（1：50）

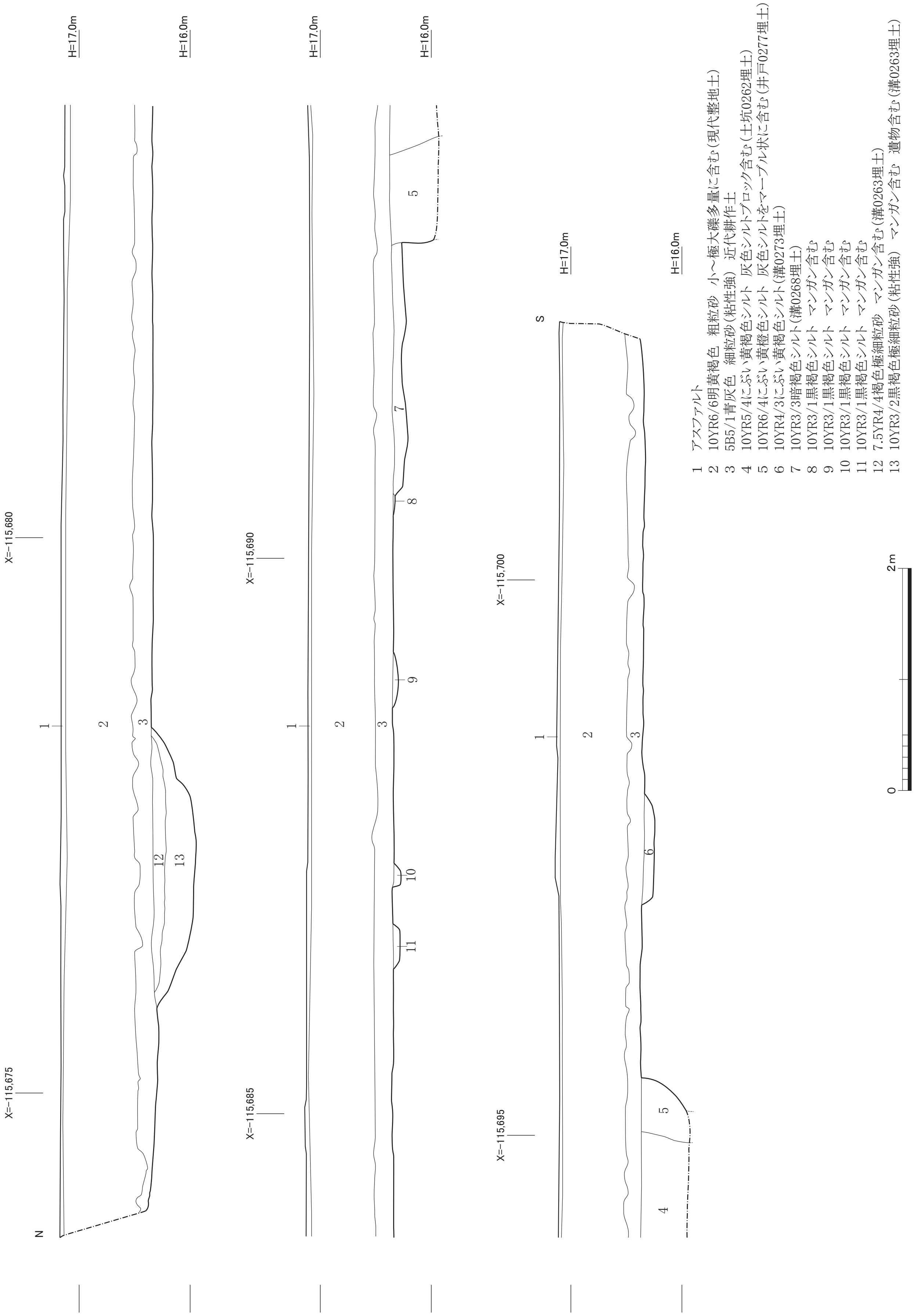


図6　調査区東壁土層断面図（1：50）

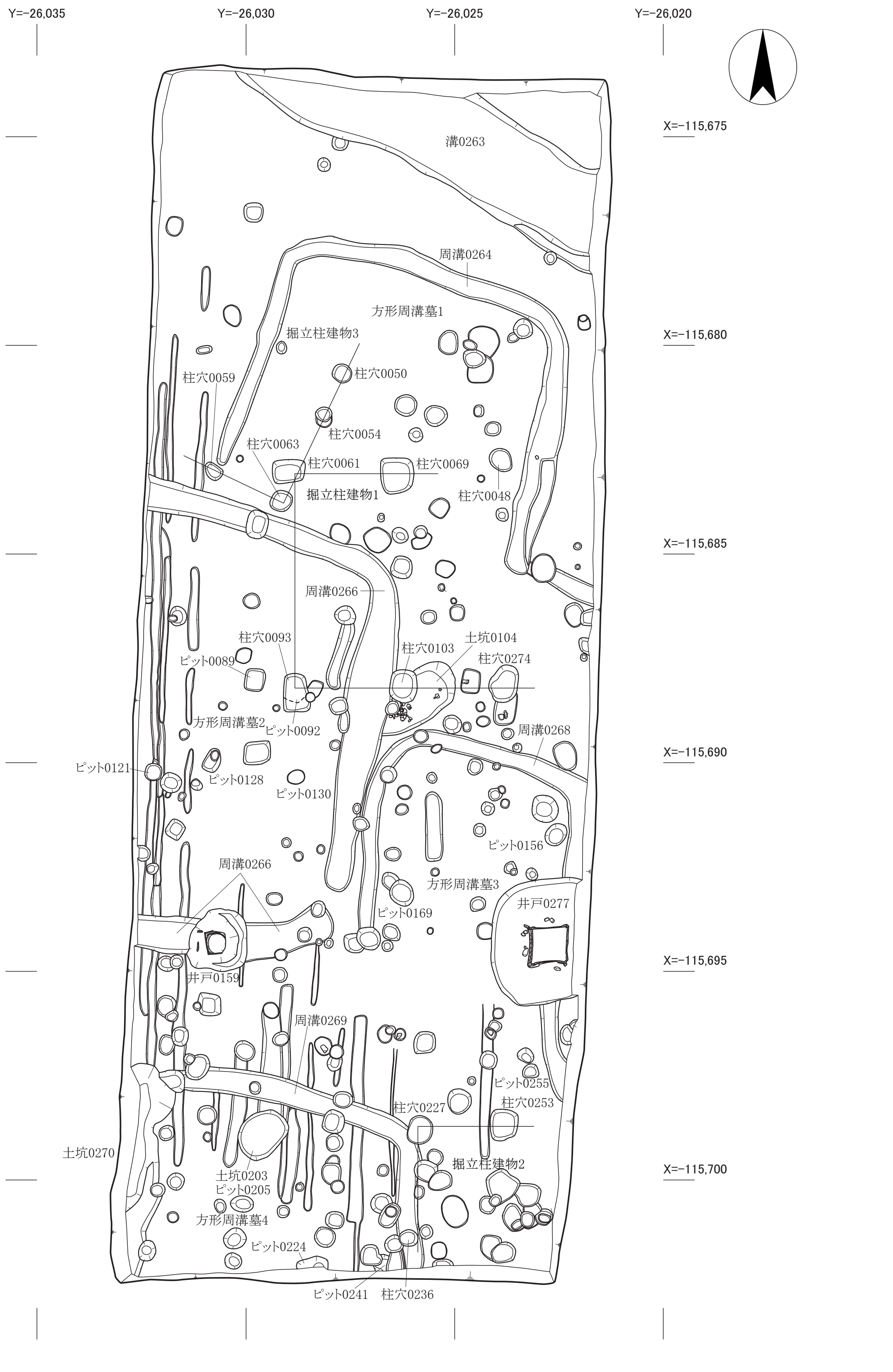


図７　調査区全体平面図（1：150）

表１　遺構概要表

時代	遺構	備考
弥生時代	方形周溝墓１・２・３・４、土坑0104･0270	
古墳時代	掘立柱建物３、溝0263、 ピット0128･0156･0169･0224･0241	
長岡京期～平安時代	掘立柱建物１・２、井戸0159･0277、 土坑0203、ピット0089･0092･0121･0130･0203･0205･0255	
鎌倉時代以降	耕作溝	

（１）長岡京期～平安時代（図８）

井戸２基、掘立柱建物２棟を検出した。

〔井戸〕（図９）

井戸0277

調査区南部東端部で検出した。掘方は一辺3.0ｍの方形であるが、東部の一部は調査区外になるため、検出することができなかった。井戸枠は組立式方形縦板組隅柱横桟留型で、一辺0.95ｍ、枠検出面から底部までの深さは約1.5ｍである。井戸枠上端部では、方形枠西辺に沿って人頭大の石が据えられていた痕跡が認められたことから、地表面では石組みによって化粧がなされていたものと考えられる。枠内埋土が単一層であることから､廃棄時には一時に埋めたと思われる。また、当該埋土には平安時代初期に比定される土師器、須恵器、墨書された須恵器、黒色土器Ａ類、緑釉陶器、瓦、鉄斧など多量の遺物が包含されていた。ただし、土師器の包含量は非常に少なかった。また、これらの遺物の大半が井戸枠内底部付近に集中して包含されていたことと、上記のような埋土の堆積状況から、井戸廃棄時に祭祀が行われたと考えられる。

井戸0159

調査区南部西寄りで検出した。掘方の平面規模は直径約1.2ｍの不定円形で、枠検出面から底部までの深さは約1.2ｍである。井戸枠は組立式方形縦板組型で、底部に曲物が据えられていた。方形枠は一辺約0.5ｍ、曲げ物は直径約0.6ｍ、高さ約0.2ｍである。

〔掘立柱建物〕

掘立柱建物１（図10）

調査区中央北寄りで検出した。柱穴0061、0069、0093、0103、0274からなる建物であり、ほぼ正方位にのる。柱間寸法は、梁間5.0ｍ、桁行きは、柱穴0061－0069間および柱穴0093－0103間は2.7ｍ、柱穴0103－0274間は2.4ｍである。柱穴は一辺0.7～0.8ｍの隅丸方形平面で、検出

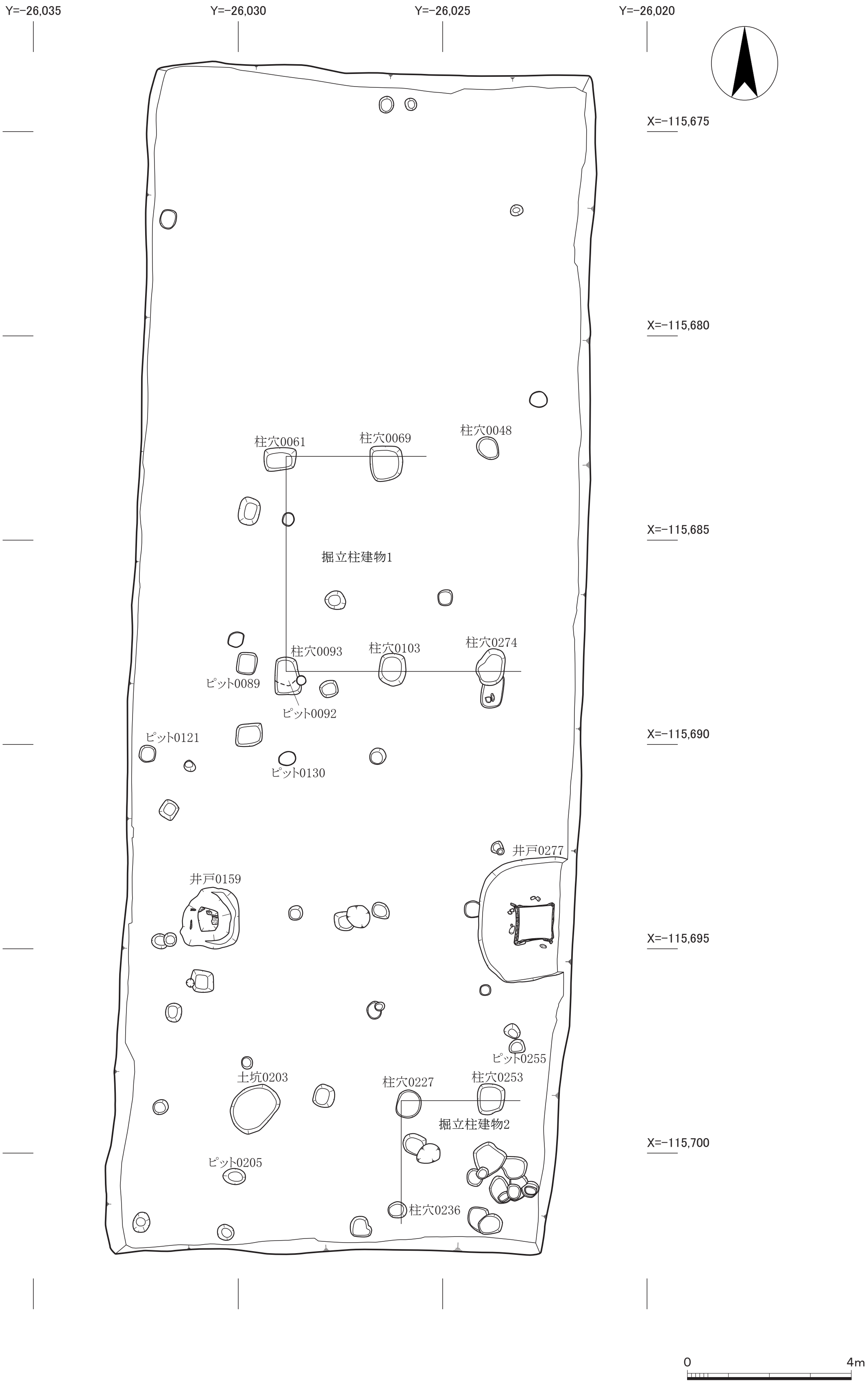
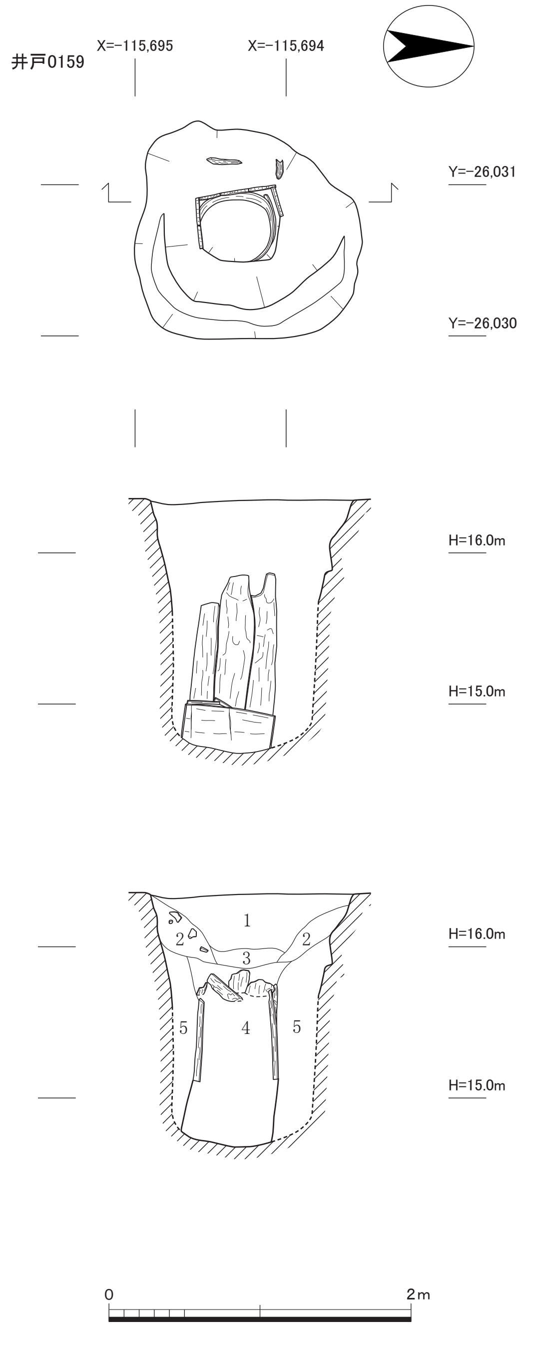
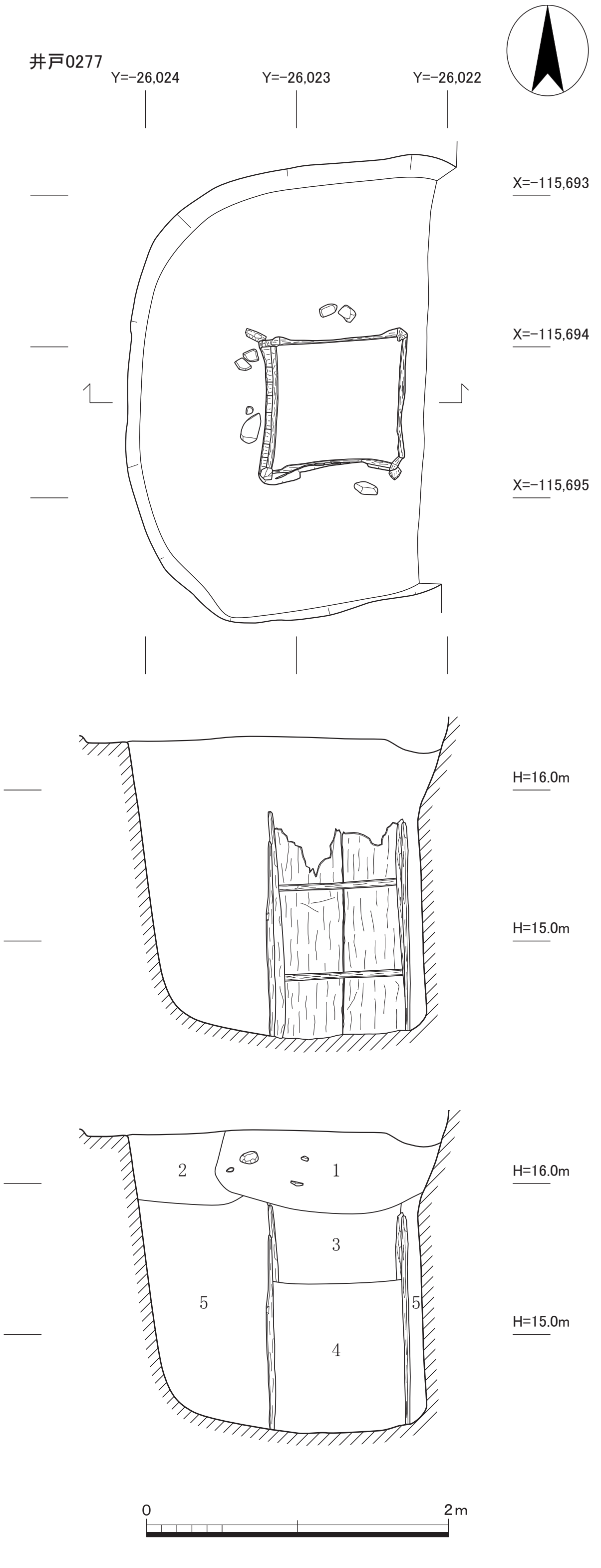


図８　調査区全体平面図（長岡京期〜平安時代）（1：150）



1　10YR4/1褐灰色　シルト　炭化物・遺物含む
2　10YR3/2黒褐色　シルト　礫・遺物含む
3　2.5Y3/1黒褐色　シルト
4　5B4/1晴青灰　粘質土　下層に遺物多く含む
5　5PB5/1青灰色　粘質土　砂粒多く含む



1　10YR5/4にぶい黄褐色　シルト　灰色シルトブロック含む
2　10YR6/4にぶい黄橙色　シルト　灰色シルトをマーブル状に含む
3　5B2/1青黒色　粘質土
4　5B4/1晴青灰　粘質土　下層に遺物多く含む
5　5B6/1青灰色　粘質土　砂粒多く含む

図９　井戸0159・0277平立断面図（1：50）

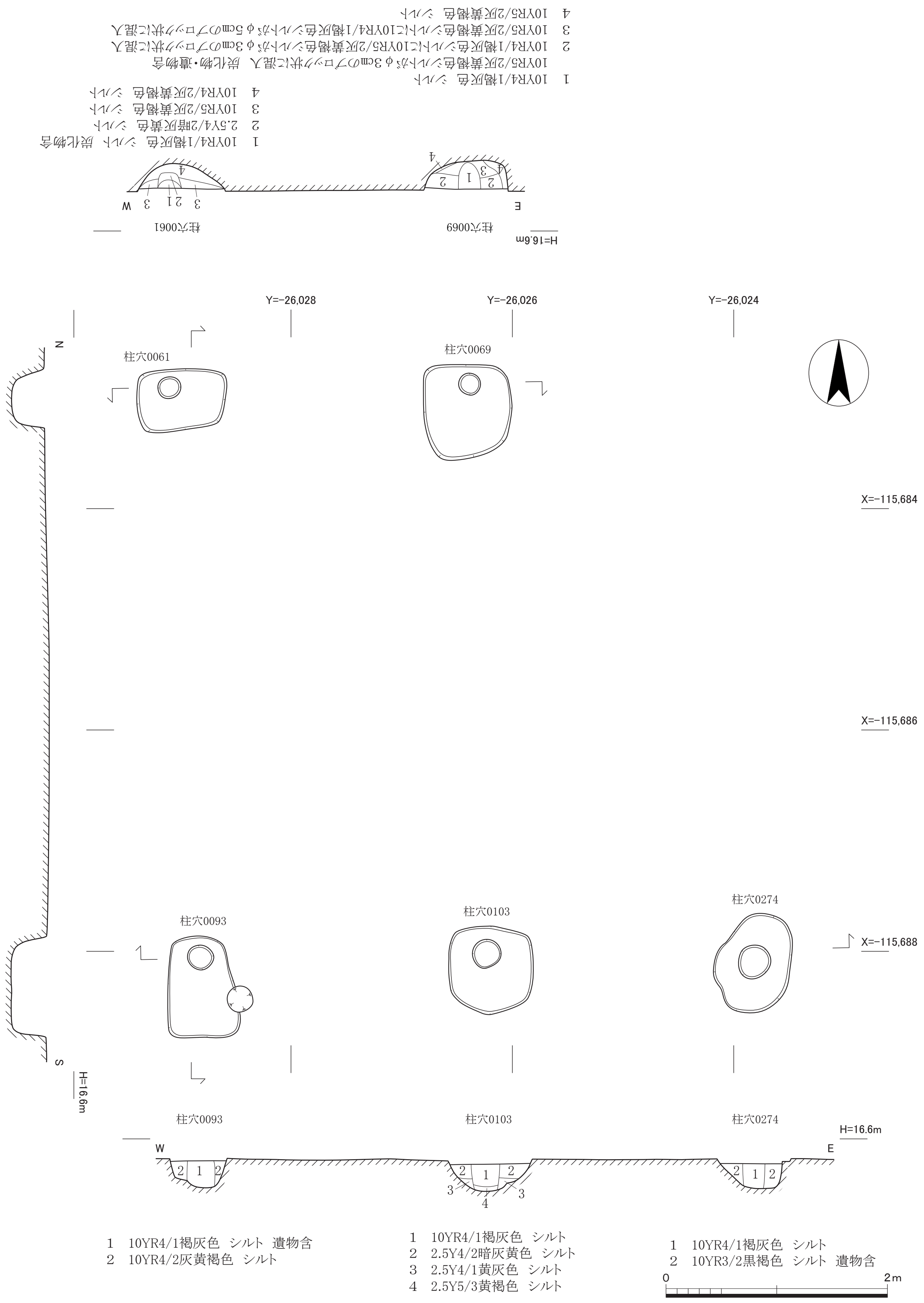


図10 掘立柱建物１平断面図（1：50）

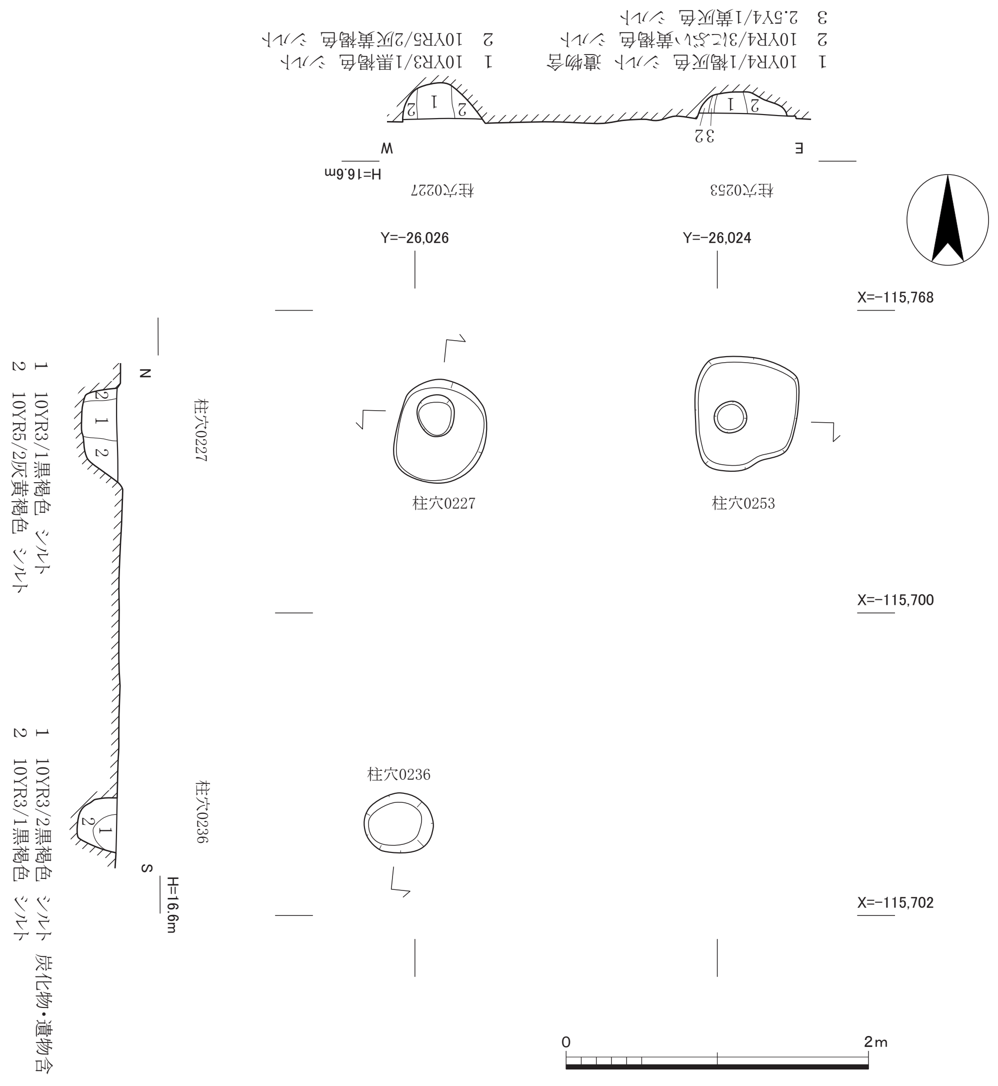


図11　掘立柱建物２平断面図（1：50）

面から底部までの深さは約 0.25 m である。

これら５基の柱穴は、上記のように隅丸方形を呈する掘方が検出され、明確な柱当りが確認されたことにくわえ、東西方向の柱間寸法が８～９尺に収まり、方向も正方位であることから掘立柱建物と判断した。当初、総柱建物を想定して柱穴 0061 と 0093 間、柱穴 0069 と 0103 間、柱穴 0069 東側および柱穴 0274 北側の柱穴を検出することに努めたが、検出することができなかった。前２箇所については、柱穴 0061、0069、0093、0103 の残存状況を鑑みると削平されたとは考え難く、当初から無かったものと考えられる。柱穴 0069 東側については、柱穴 0048 を検出しているが、掘方の平面形、規模ともに当建物の他の柱穴と符号しないため、図 10 には記載していないが、柱痕部分のみを検出した可能性は残る。上記のことによって総柱建物としての想定は不可能となり、柱穴 0061、0093 から更に西へ展開する可能性を考え、柱穴の検出を試みたが、検出することはできなかった。これらのことから、梁間寸法は広いものの、柱穴 0061、0093 を西端列として東に展開する梁間一間、桁行き二間以上の東西棟と考えられる。

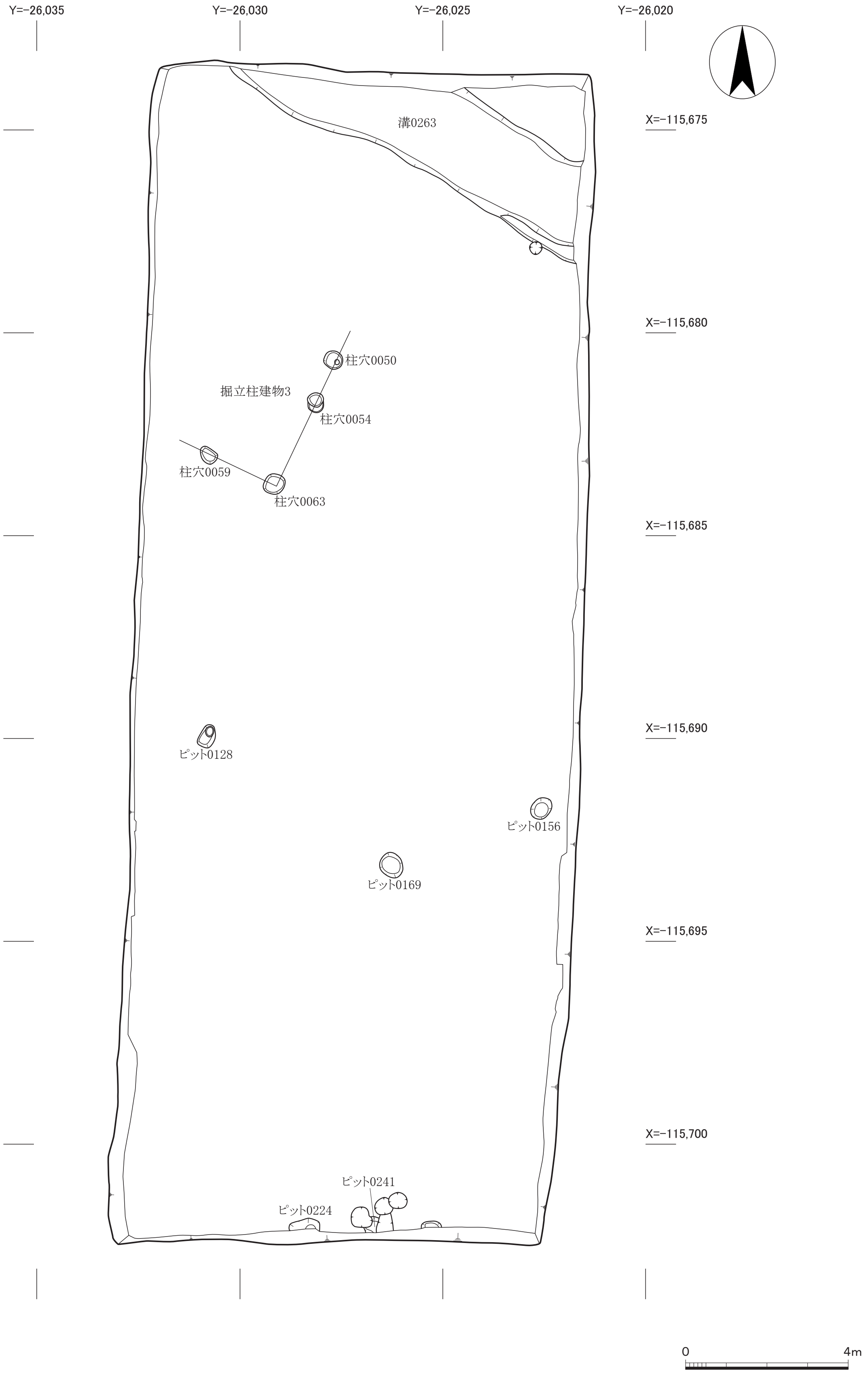


図12　調査区全体平面図（古墳時代）（1：150）

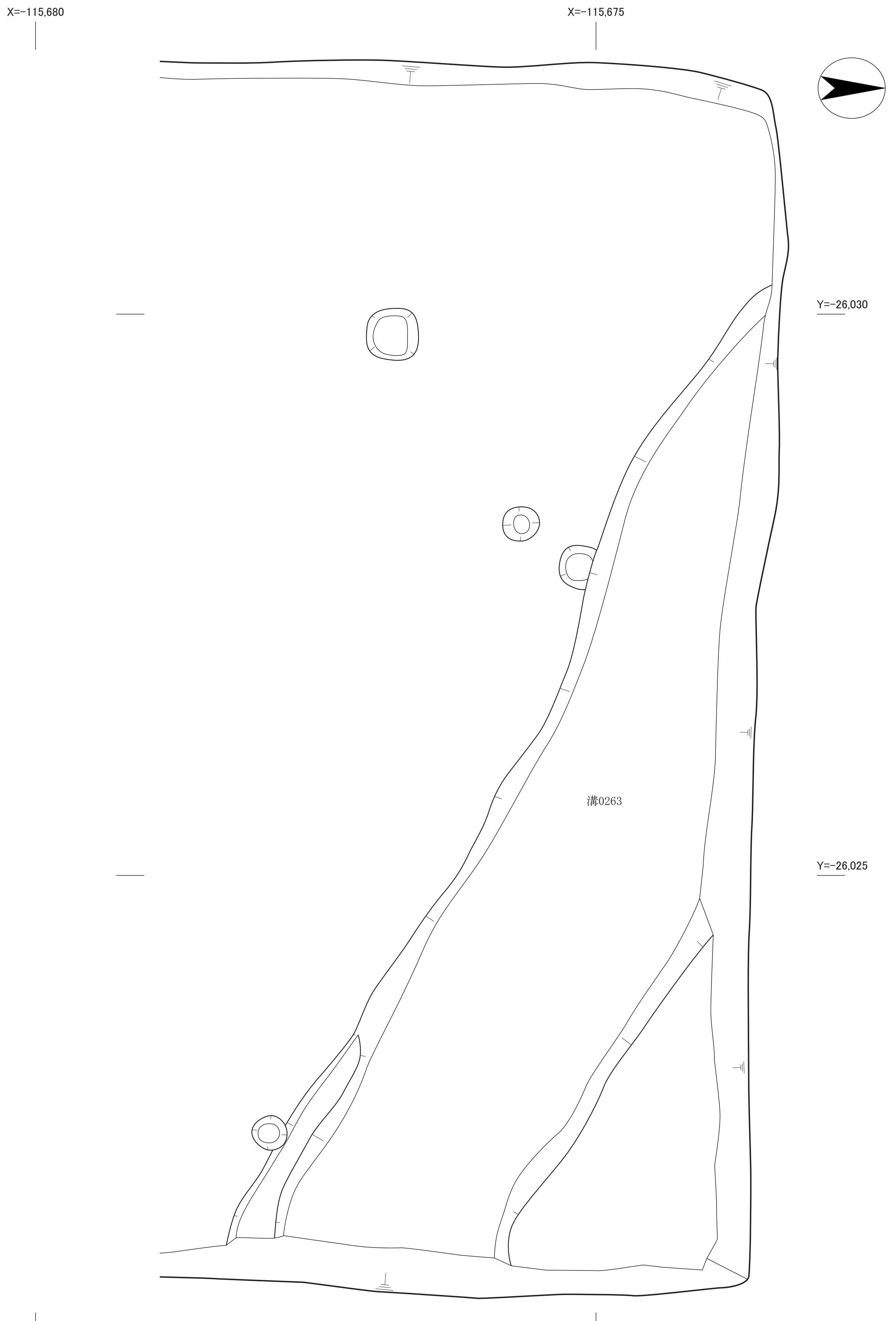


図13　溝0263平面図（1：50）

掘立柱建物２（図 11）

調査区南東隅で検出した。柱穴 0236、0227、0253 からなる。東西一間、南北一間分を検出したのみで全体規模は不明であるが、東および南へ展開すると思われる。掘立柱建物 1 と同様、ほぼ正方位にのる。柱間寸法は東西方向（柱穴 0227 － 0253 間）が 1.9 m、南北方向（柱穴 0227 － 0236 間）が 2.7 mである。柱穴は一辺 0.5 m～ 0.8 mの隅丸方形で、検出面から底部までの深さは約 0.25 mである。

（２）古墳時代（図 12）

溝１条、掘立柱建物１棟を検出した。

〔溝〕

溝 0263（図 13）

調査区北東端部に位置する。北西から南東方向に走る溝で、幅 2.0 m、長さ 7.7 m分を検出した。

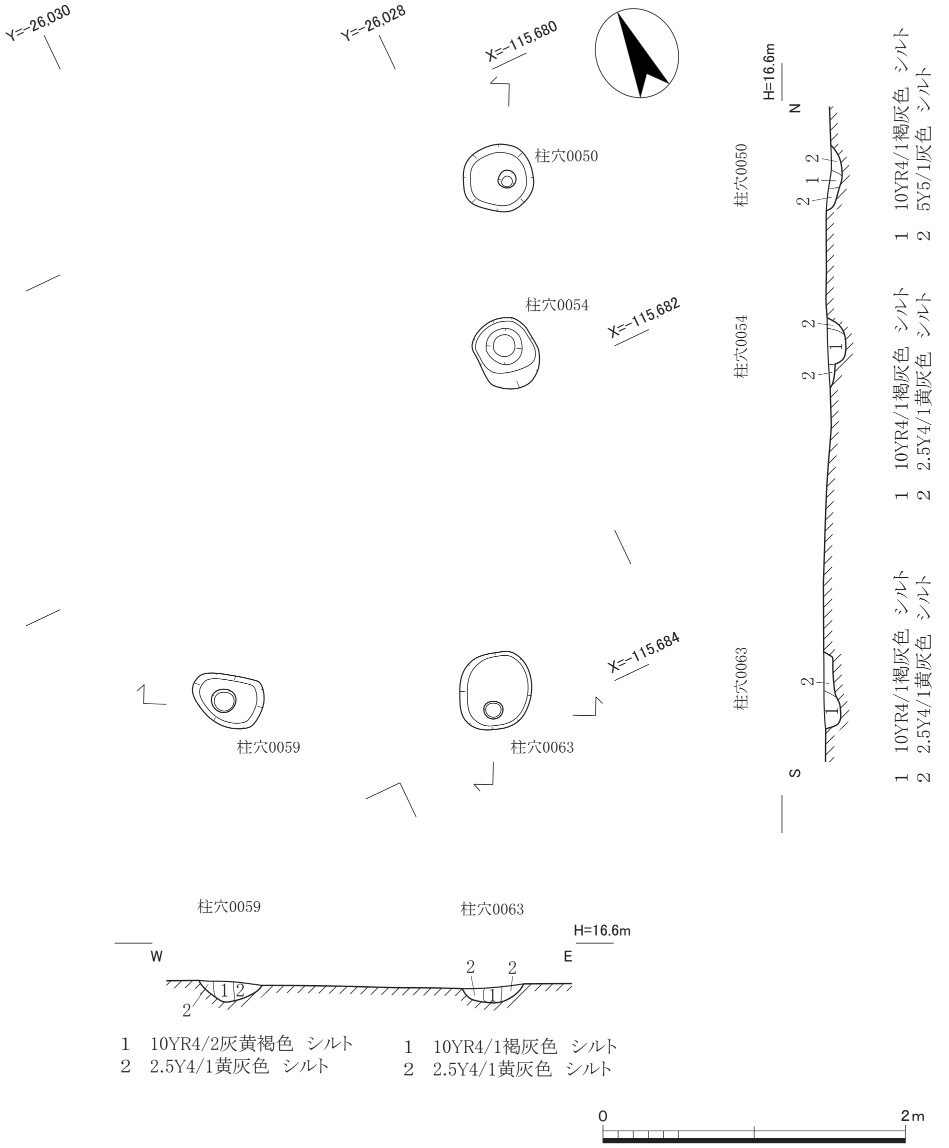


図14　掘立柱建物３平断面図（1：50）

検出面からの深さは約 0.4 mである。埋土内には弥生土器片および古墳時代終末期の須恵器片が包含されていた。

〔掘立柱建物〕

掘立柱建物３（図 14）

調査区北部西半で検出した。柱穴 0050、0054、0063、0059 からなる、梁間一間以上、桁行き二間以上の南北棟である。正方位から東へ約 26 度振る。柱間寸法は東西方向が 1.8 m、南北方向が 1.2 mおよび 2.4 mである。柱穴は一辺 0.4 m～ 0.5 mの隅丸方形で、検出面から底部までの深さは 0.1 m～ 0.15 mである。

（３）弥生時代（図 15）

方形周溝墓４基、土坑２基を検出した。検出した方形周溝墓は何れも削平を受けており、墳丘、埋葬施設は残存していなかった。

〔方形周溝墓〕

方形周溝墓１（図 16）

調査区北寄りで検出した、溝 0264 を周溝とする方形周溝墓である。墳丘は削平されており、東西および北周溝を検出したのみである。南周溝は検出できなかったが、削平により失われたか、南西に位置する方形周溝墓２の北周溝を共有していた可能性がある。周溝の規模は、西で幅 0.5 m、検出面からの深さ 0.05 m、北で幅 0.5 m、検出面からの深さ 0.05 m、東は幅 0.65 m、検出面からの深さ 0.16 m。平面規模は東西周溝の心々間は 7.0 mである。東周溝内からⅡ様式に比定される壺の底部が出土した。

方形周溝墓２（図 17）

方形周溝墓１の南西側、調査区中央西よりに位置し、溝 0266 を周溝とする。墳丘は削平されている。南北周溝の東半および東周溝を検出した。南東角については周溝が検出されなかったが、削平によるものか、開放されていたものかは不明である。平面規模は南北周溝の心々間は 10.0 mと、今回検出した中で最大である。周溝は、北で幅 0.6 m、検出面からの深さ 0.1 m、東で幅 0.65 m、検出面からの深さ 0.15 m、南で幅 0.65 m、検出面からの深さ 0.05 mである。

方形周溝墓３（図 18）

方形周溝墓２の東、調査区中央部の南東寄りに位置し、溝 0268 を周溝とする。墳丘は削平されている。東西周溝および北周溝を検出した。南周溝は検出されず、削平されたものと考えられる。平面規模は東西周溝の心々間は 5.0 mであり、今回検出したなかで最小である。周溝の規模は西で幅 0.35 m、検出面からの深さ 0.1 m、北で幅 0.35 m、検出面からの深さ 0.03 m、東で幅 0.5 m、検出面からの深さ 0.13 m。西周溝が方形周溝墓２の東周溝と極めて近接しており、築造時には共有あるいは両者が切り合っていた可能性がある。

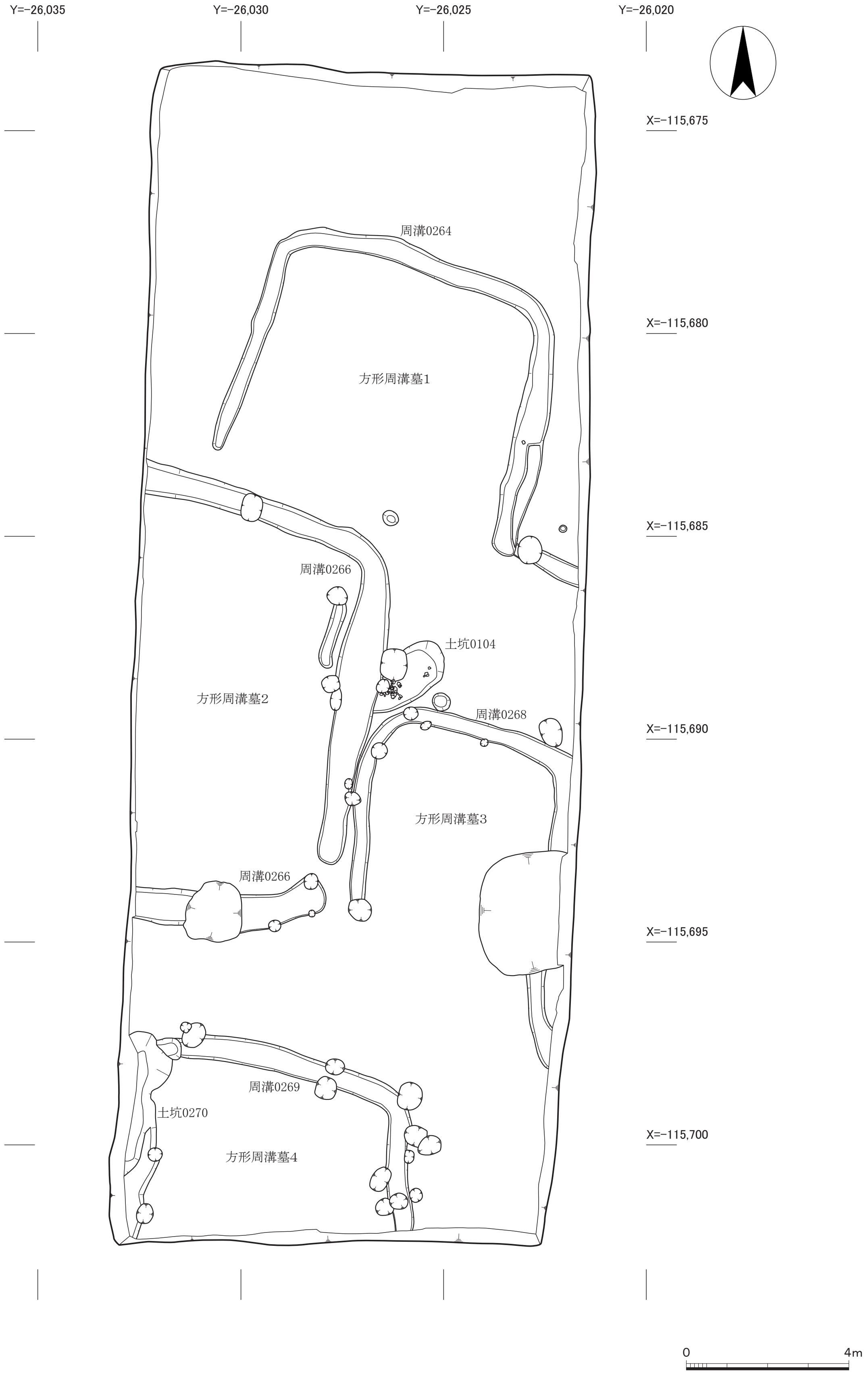


図15　調査区全体平面図（弥生時代）（1：150）

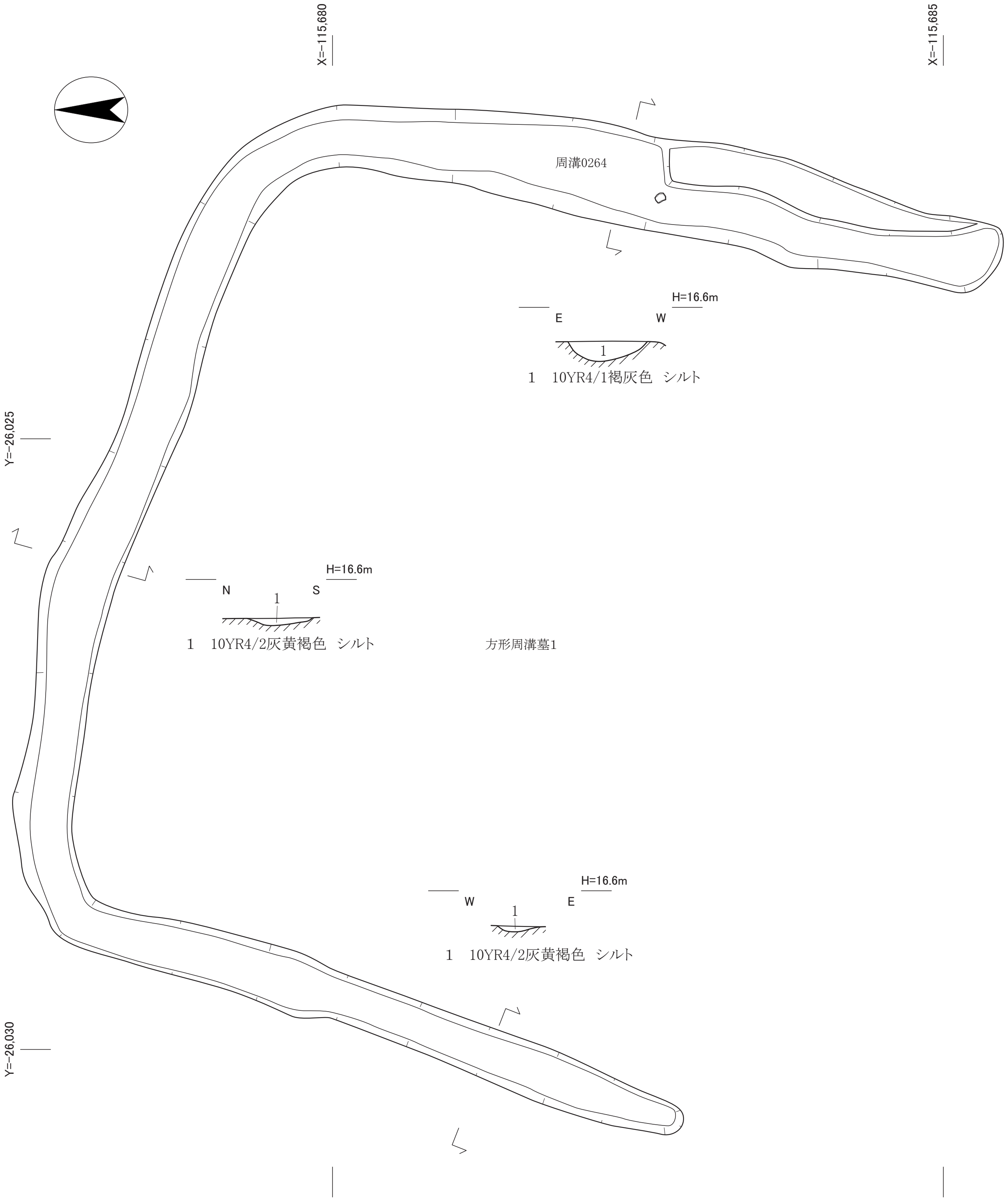


図16　方形周溝墓１平断面図（1：50）

方形周溝墓４（図 19）

調査区南西部に位置し、溝 0269 を周溝とする。北周溝および東周溝の北半を検出した。西周溝は土坑 0270 に切られ、南周溝は検出しておらず調査区外になると思われる。そのため、平面規模は不明である。墳丘は削平されている。周溝の規模は、北で幅 0.54 m、検出面からの深さ 0.1 m、東で幅 0.44 m、検出面からの深さ 0.12 mである。

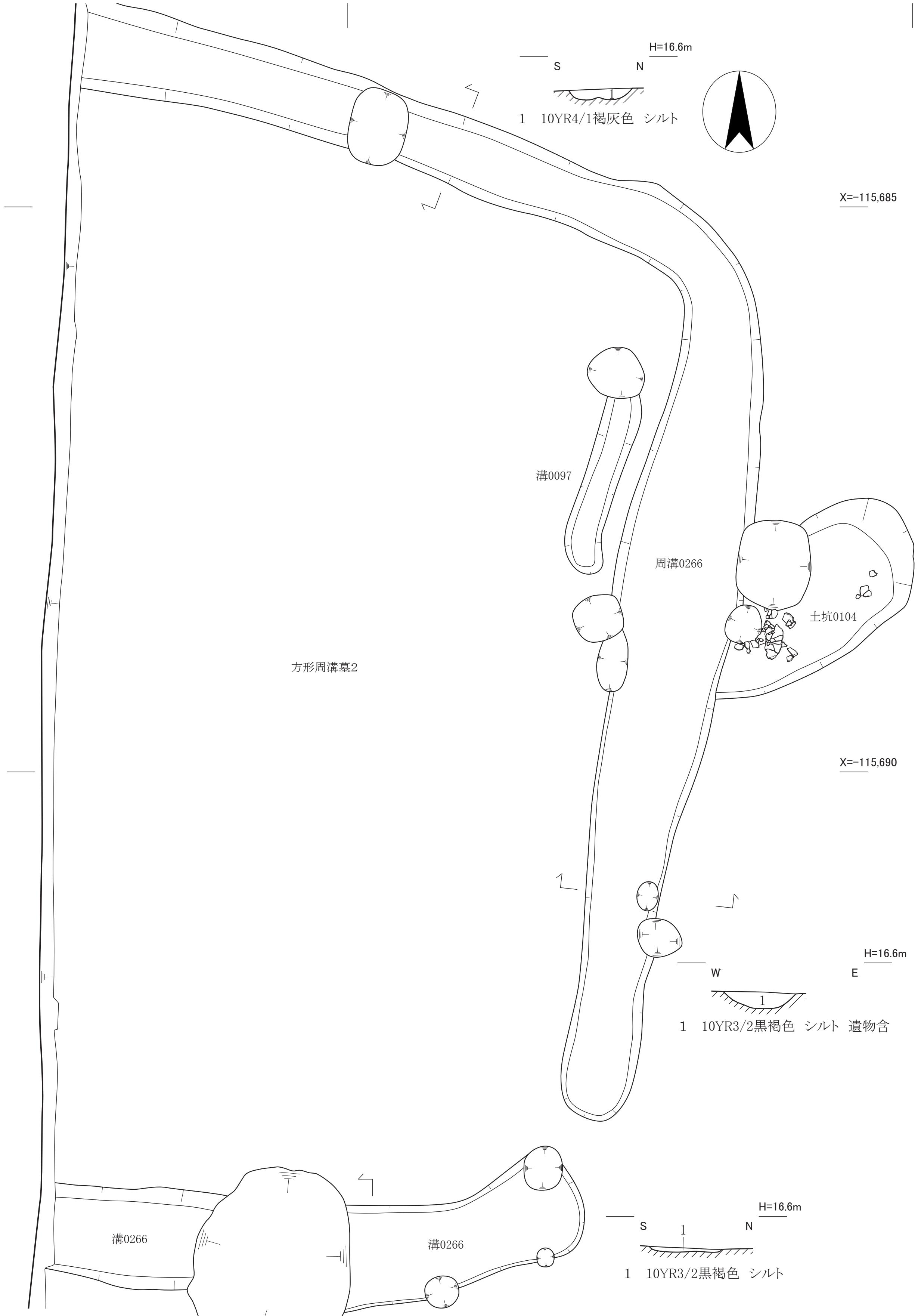


図17　方形周溝墓２平断面図（1：50）

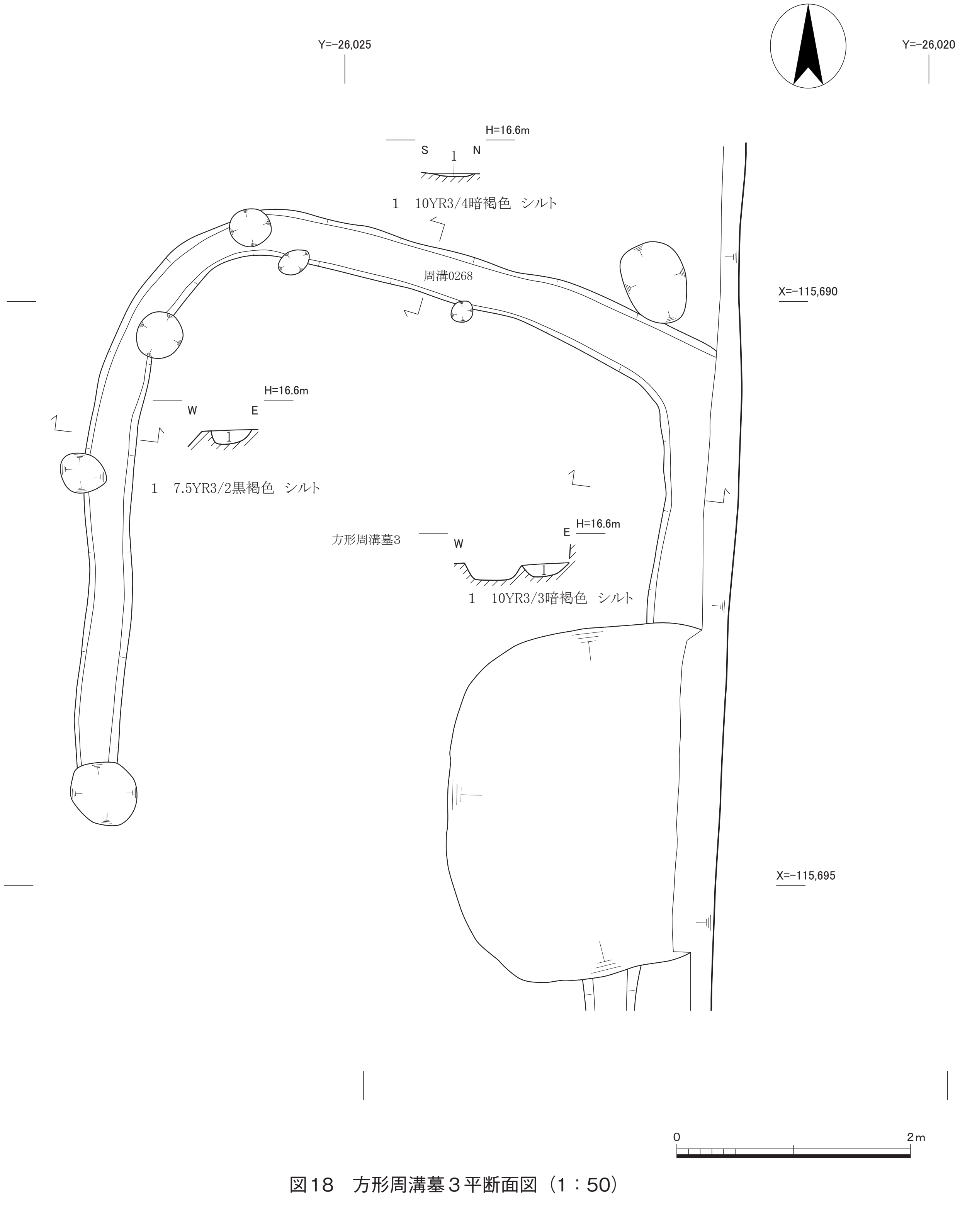


図18　方形周溝墓３平断面図（1：50）

〔土坑〕

土坑 0104（図 20）

調査区中央東寄りで検出された遺構で、西端部を方形周溝墓２の東周溝に切られている。平面形は東西方向の長方形を呈し、東西幅 1.7 m以上、南北長 1.4 m、検出面からの深さは 0.2 mである。遺構底部から弥生土器片がまとまって出土した。

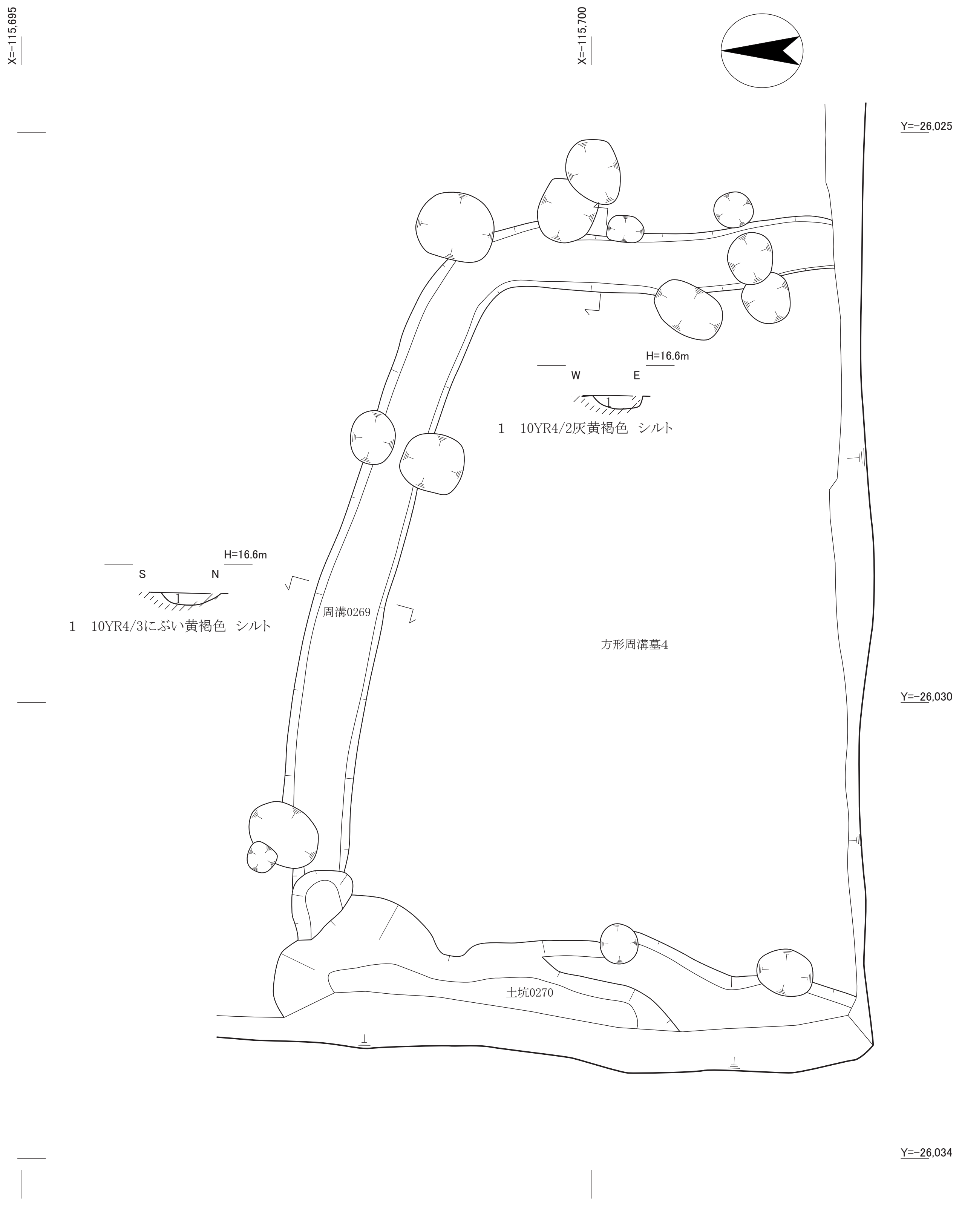


図19　方形周溝墓４平断面図（1：50）

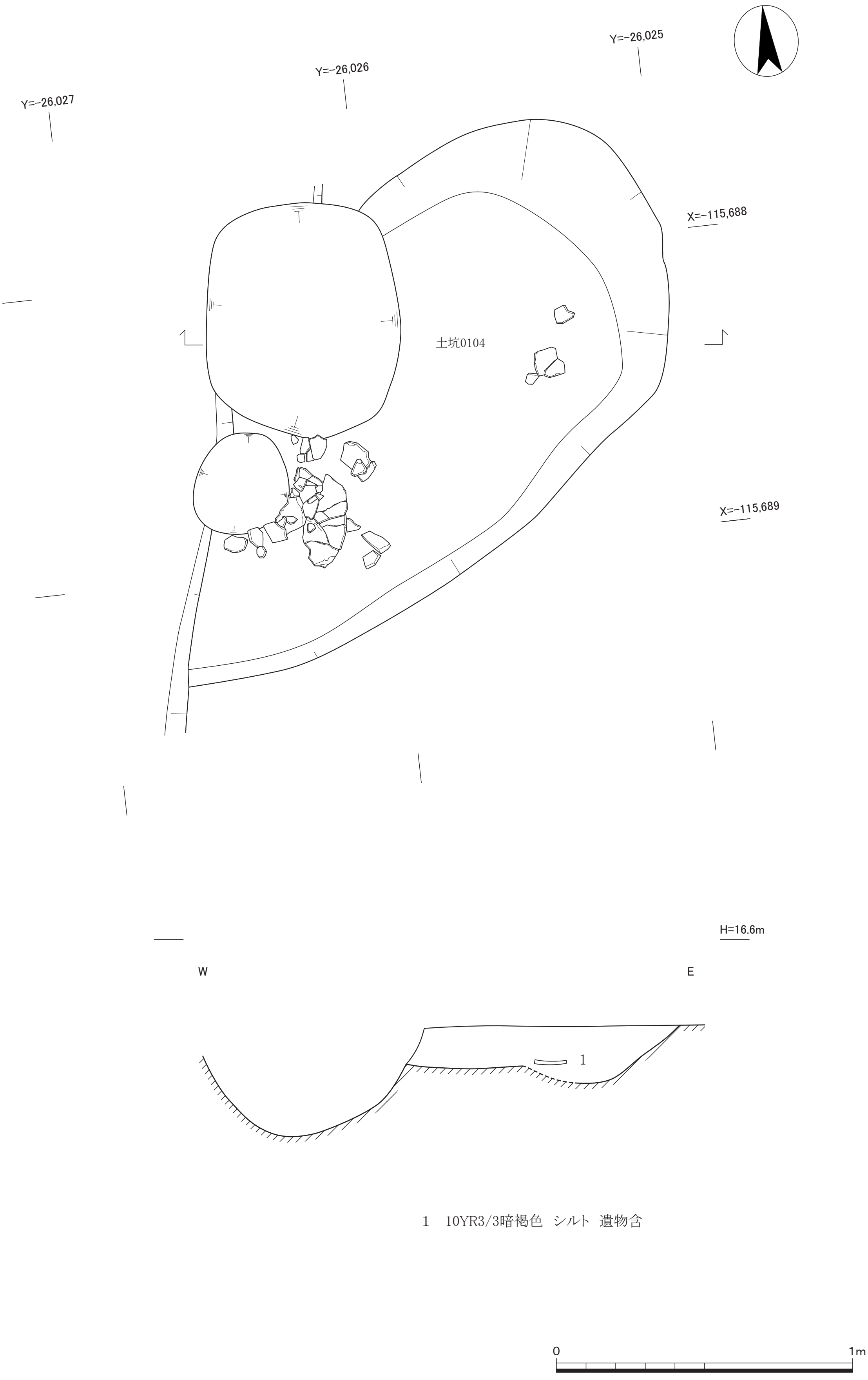


図20　土坑0104遺物出土状況図、断面図（1：20）

表２　遺物概要表

時代	内容	コンテナ数	Ａランク点数	Ｂランク点数	Ｃランク箱数
弥生時代	弥生土器、石製品		弥生土器３点石製品１点	弥生土器５点	
古墳時代	須恵器		須恵器９点		
長岡京期～平安時代	土師器、黒色土器、須恵器、緑釉陶器、緑釉陶器素地、硯、鉄製品		土師器７点 黒色土器２点 須恵器４点 緑釉陶器１点 緑釉陶器素地３点 風字硯１点 鉄斧１点		
合計		12 箱	32 点（２箱）	５点（１箱）	９箱

３　出土遺物

遺物はコンテナで 12 箱分が出土した。弥生土器、土師器、須恵器が主で、次いで黒色土器Ａ類、陶磁器類が多く出土している。

（１）長岡京期～平安時代（図 21 － １～ 19）

井戸 0277

井戸枠内から出土した遺物を図示する。

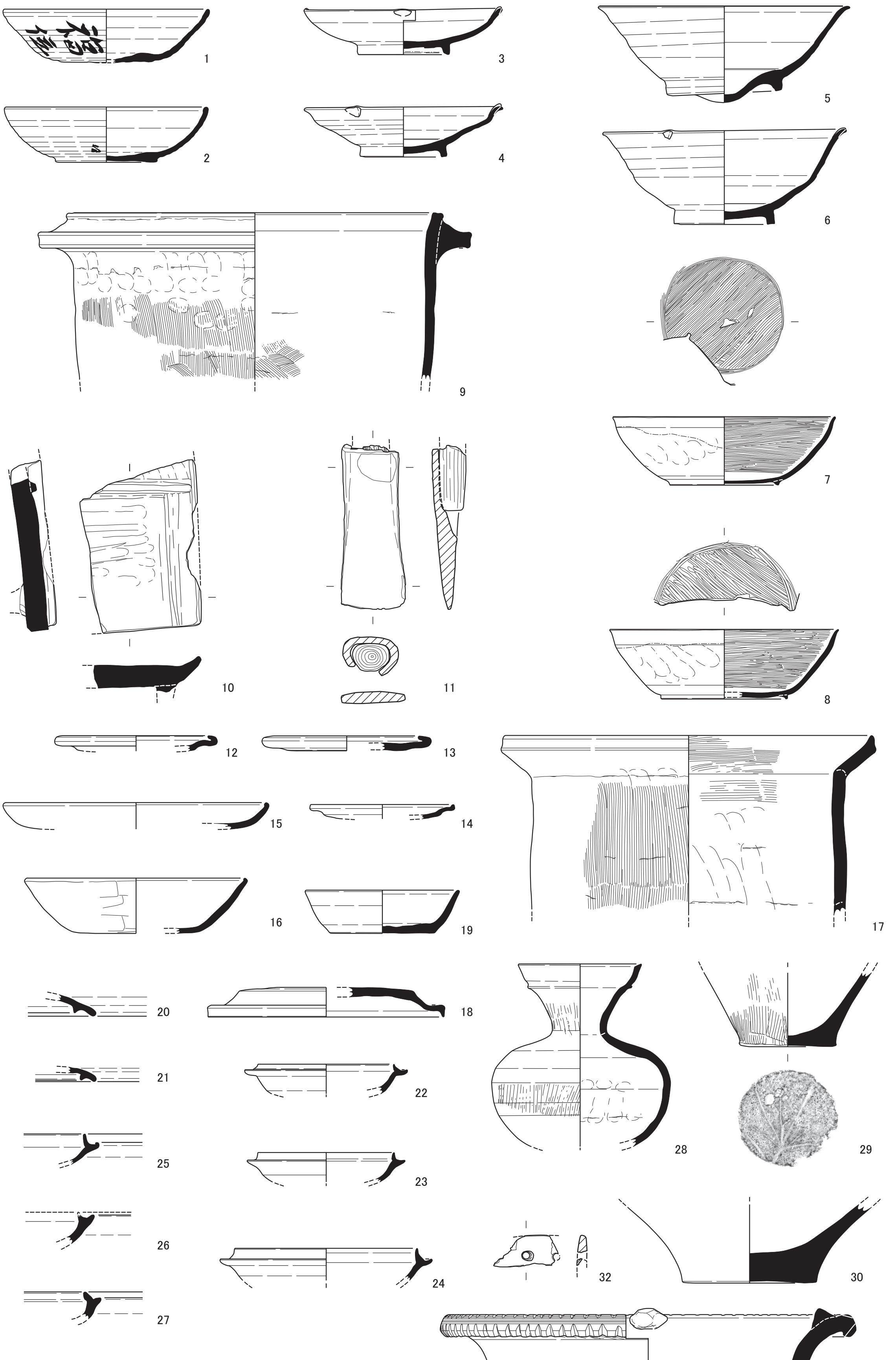
１は須恵器杯である。体部外面に墨書二文字分が認められ、「福位」と読める。口径 13.6cm、器高 3.6cm、ロクロナデで成形し、底部はヘラ切り後にナデを施す。平底の底部から体部が内湾しながら、やや開き気味に斜め上方へ立ち上がり、口縁端部は内面側が若干肥厚して丸くおさまる。

２は須恵器椀である。体部外面に墨書が認められる。口径 13.5cm、器高 3.7cm、ロクロナデで成形し、底部はヘラ切り後にナデを施す。平底の底部から体部が内湾しながら、やや立ち気味に立ち上がり、口縁端部は内面側が肥厚して丸くおさまる。

３は緑釉陶器の輪花皿で、口径 13.1cm、器高 3.2cm、ロクロナデで成形し、高台はケズリ出しである。体部外面を回転ケズリで調整後、内外面にミガキを施す。体部は内湾しながら緩く外方に立ち上がり、口縁端部が僅かに外反しながら丸くおさまる。

４は緑釉陶器素地の輪花皿である。口径 13.0cm、器高 3.4cm、高台をケズリ出した後、体部にかけてミガキを施す。体部は緩く直線的に外方へ立ち上がり、口縁部は強く内側に屈曲して外湾し、口縁端部は丸くおさまる。

５は緑釉陶器素地の椀である。口径 16.8cm、器高 6.5cm、ロクロナデで成形し、高台はケズリ出しで、内外面にミガキを施す。体部は内湾しながら外方に立ち上がり、口縁部が外反して端部は丸くおさまる。底部が外面側へヘソ状に、高台端部よりも突出しているために座らないが、内外面ともに、この突出部を成形した後にミガキを施していることから、意図したものであると思



1～11　井戸0277　　12～13　井戸0159
14～28　その他　　29　方形周溝墓1
30、32　方形周溝墓2　31　　土坑0270

0　　20㎝

図21　遺物実測図（1：4）

われる。

６は緑釉陶器素地の輪花椀である。口径 16.2cm、器高 6.5cm、ロクロナデで成形し、高台はケズリ出しで、内外面にミガキを施す。体部は内湾しながら、やや立ち気味に外方へ立ち上がり、口縁部は外反して端部は丸くおさまる。

７は黒色土器Ａ類の椀である。口径 15.0cm、器高 4.6cm、内面はナデの後、密にミガキを施し、口縁部外面はヨコナデ、体部外面はオサエ、底部外面はナデの後にミガキで調整される。高台は貼り付けである。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部はやや外反して口縁端部は丸くおさまる。

８は黒色土器Ａ類椀である。口径 15.3cm、器高 4.7cm、内面にナデの後、密にミガキを施し、口縁部外面はヨコナデ、体部外面はオサエ、底部外面はナデの後にミガキで調整される。高台は貼り付けである。体部は内湾しながら立ち上がり、口縁部はやや外反して口縁端部は丸くおさまる。

９は土師器の羽釜である。口縁部のみ残存している。円筒形の体部から口縁が直線的に外方へ伸び、端部は平坦面を作る。口縁端部下に幅約 2.0cm の鍔を貼り付ける。体部外面はオサエ後ハケ、鍔部および体部内面はナデ、口縁端部はヨコナデで調整される。

10 は風字硯である。残存幅 8.2cm、残存長 10.7cm、左縁部および海部端部、脚を欠損している。側面、陸側端面をヘラケズリによって成形する。くわえて、陸側端面裏面側をヘラケズリによって小さく面取りし、裏面は板状の工具でナデ調整を施す。硯面はナデ調整されるが、成形時の痕跡と思われる凹凸が認められる。また、海部と陸部の間に仕切りが設けられている。

11 は袋状鉄斧である。全幅 4.3cm、全長 11.1cm、刃部と袋部の境界は直線的で、刃端部に向かって幅が広くなっている。袋部には木柄が残存している。

井戸 0159

井戸 0159 から出土した遺物で、図示できるものは２点である。

12 は土師器皿で、口径 9.7cm、器高 1.0cm である。

13 は土師器皿で、口径 9.8cm、器高 1.0cm である。

その他の遺構

14 はピット 0130 から出土した土師器皿で、口径 9.6cm、器高 1.0cm である。体部内面から口縁部内外面をヨコナデ、体部外面をオサエで調整する。

15 はピット 0205 から出土した土師器皿で、口径 17.5cm、器高 1.8cm である。体部内面にナデ、口縁部内面にヨコナデ、口縁部外面にケズリを施す。

16 はピット 0089 から出土した土師器皿で、口径 14.7cm、器高 5.7cm である。底部内面にナデ、体部～口縁部内面にヨコナデ、体部外面～底部外面にヘラケズリを施す。

17 はピット 0121 から出土した土師器の甕である。直線的に立ち上がる体部から屈曲して外方へ口縁がのび、口縁端部は面をなす。体部外面は縦方向のハケ、内面はナデ、口縁部外面から端部はヨコナデ、内面を横方向のハケで調整する。

18は柱穴0092から出土した須恵器杯蓋で、口径15.8cm、器高2.0cmである。やや平坦な天井部から下に屈曲して斜め下方に延び、口縁部で強く上方に屈曲して平行にのび、再び下方に強く屈曲して端部は丸くおさまる。天井部の外周は回転ヘラケズリ、その内側をヘラ切り後ナデ、屈曲部から内面にかけてロクロナデで調整する。

19は掘立柱建物2（柱穴0236）から出土した須恵器杯で、口径10.3cm、器高2.9cmである。底部はヘラ切り後ナデ、体部内外面および底部内面をロクロナデで調整する。体部は直線的に外方へ向かって立ち上がり、口縁端部は丸くおさめられる。

（2）古墳時代（図21 － 20 ～ 28）

20はピット0255から出土した須恵器杯蓋である。小片のため、口径は復元することができなかった。

21はピット0241から出土した須恵器杯蓋である。

22はピット0169から出土した須恵器杯身で、口径9.1cm、器高2.0cmである。口縁部は内傾しながら直線的に伸び、高さは低い。受部はやや上向きに短く伸び、端部は丸い。体部は内湾しながら立ち上がる。

23はピット0156から出土した須恵器杯身で、口径9.1cm、器高2.0cmである。口縁部は僅かに内傾しながら立ち上がり、端部は丸くおさまる。受部は水平に伸びて端部は丸い。体部は内湾しながら立ち上がる。内面から受部下部にかけてロクロナデを施し、体部は回転ケズリのままである。

24はピット0156から出土した須恵器杯身で、口径12.3cm、器高2.2cmである。口縁部は外反しながら真っ直ぐに立ち上がり、端部は丸く収まる。受部はやや上向きに伸び、端部は丸い。体部は内湾しながら立ち上がる。内外面ともにロクロナデを施す。

25はピット0128から出土した須恵器杯身である。

26は溝0263から出土した須恵器杯身である。

27は柱穴0069から出土した須恵器杯身である。

28はピット0066から出土した須恵器の𤭯である。体部は内湾しながら外方に立ち上がり、肩部はやや直線的に内方へ伸びる。頸部は直線的に外方へ立ち上がり、口縁部は屈曲して直線的にやや立ち気味に外方へ立ち上がる。口縁端部は内傾する面をなす。体部下半は回転ケズリ後ナデ、体部上半はタタキ後ナデ、肩部から口縁部にかけてロクロナデで調整を施す。口縁が立ち上がる屈曲部には一条の稜が表現され、その直上に沈線が入る。口縁部から頸部の内面にはロクロナデ、肩部から体部の内面にはオサエの痕跡を残す。

（3）弥生時代（図21 － 29 ～ 32）

弥生土器は方形周溝墓の周溝内、土坑0270を中心に出土したが、極小片が大半であり、図示できるものは少ない。また、土坑0104の底部からも弥生土器片がまとまって出土したが、図化できるほどにまで接合、復元することはできなかった。

29は方形周溝墓１の東周溝内から出土した弥生土器の壺あるいは甕の底部である。内面は摩滅のため調整は不明瞭、外面は縦方向のハケ、底面に木の葉痕が残る。Ⅱ様式に比定される。

30は方形周溝墓２の南周溝から出土した弥生土器の壺あるいは甕の底部である。内外面ともに摩滅のため調整は不明である。

31は土坑0270から出土した弥生土器の壺である。口縁の一部のみ残存している。口縁端部の上下端にキザミ、その間の空間および口縁部下端部に直線文が施される。口縁部内面にコブ状突起を有する。Ⅱ様式に属する。

32は方形周溝墓２の東周溝内から出土した石包丁である。

第Ⅳ章　まとめ

今回の調査では、弥生時代中期の方形周溝墓４基および土坑２基、古墳時代の溝および掘立柱建物１棟、長岡京期から平安時代にかけての井戸２基、掘立柱建物２棟を検出した。これら以外にも時期不明ながら多数のピットを検出した。一方で、中世の遺構は耕作溝が極浅く残っていたのみであった。

方形周溝墓は最小のもので一辺約5.0ｍ、最大のもので一辺約10.0ｍの規模で、何れも主体部は検出されなかった。周溝についても最も深い箇所で約0.15ｍ、浅いところでは約0.05ｍが残存していたに過ぎず、著しく削平を受けたものと考えられる。周溝内からは弥生時代中期に比定される土器類が出土しているが、いずれも小片であり、供献遺物および祭祀の痕跡を確認することはできなかった。

古墳時代のものは遺構、遺物とも前後の時期に比して少ないが、溝１条、掘立柱建物１棟を検出した。遺物では、後期～終末期に比定される須恵器杯Ｈ身が数点ながら出土した。調査区北東端部で検出した溝0263は、その堆積状況から滞水していたものと思われる。また、掘立柱建物の柱穴は検出面から底部までの深度が約0.15ｍと弥生時代の遺構に比して比較的良好な残存状況を示す。

長岡京期から平安時代の遺構として掘立柱建物２棟、井戸２基を検出した。検出面から遺構底部までの深度が掘立柱建物の柱穴で約0.25ｍ、井戸で約2.9ｍと、検出した遺構のなかで、この時期のものが最も良好に残存していた。また、井戸0277の枠内埋土には墨書された須恵器や意図的に底部を突出させたと思しき緑釉陶器椀素地、緑釉陶器椀などが共伴して包含されており、枠内底部に集中していたことと併せて、井戸廃棄時の祭祀が行われたと考えられる。井戸0159からも遺物は出土しているが、井戸0277とは異なり、墨書土器や緑釉陶器など、祭祀を思わせるような遺物は含まれていなかった。

中世の遺構としては南北方向の耕作溝を検出したが、検出面からの深度は非常に浅く、大きく削平をうけたものと考えられる。

以上のことから、調査地では弥生時代中期には墓域として機能しており、古墳時代にはこれらが削平された後に集落が営まれ、居住域となったと思われる。長岡京期については、井戸や建物などは検出されなかったが、当該期の遺物が少数ながら出土していることから、生活域の範囲内であったと思われる。平安時代初期に至って井戸、掘立柱建物が構築され、居住域として土地利用がなされたと考えられる。この平安時代初期の生活面が構築される際、古墳時代の生活面が多少の削平を受けていることが、古墳時代遺構の残存状況から想定される。中世になって耕作地となるが、検出された耕作溝が非常に浅いことから、当時の地表面は遺構検出面から数10cm高かったと思われる。

既往の調査により、中久世遺跡南部には弥生時代から平安時代にかけて、数条の自然河川が北西から南東に向けて流れていたことが確認されている。中久世遺跡では昭和52年度、昭和54年度、平成11年度、平成18年度の調査において方形周溝墓を検出している。これらのうち、昭和52年度および平成18年度の調査地は自然流路の北東、昭和54年度、平成11年度の調査地は南西に位置する。この２地点での調査においては、方形周溝墓に加えて弥生時代～古墳時代にかけての竪穴住居、飛鳥時代～奈良時代の掘立柱建物、平安時代の井戸、掘立柱建物、鎌倉時代の掘立柱建物が検出されている。

今回の調査地もまた、推定される自然河川の南西に広がる微高地上に位置し、弥生時代の方形周溝墓に加えて古墳時代の掘立柱建物、平安時代初期の井戸、掘立柱建物が検出された。昭和54年度、平成11年度の調査成果と併せ、中久世遺跡南西端部地域については、弥生時代に墓域として、古墳時代～鎌倉時代に居住域として土地利用がなされた状況を想定することができる。とりわけ昭和54年度調査で検出された方形周溝墓と、平安時代初期の掘立柱建物については同時期のものと想定され、両地点の距離も直線距離で約120 mと近接することから、一連の墓域、集落が営まれたとも考えられる。

中久世遺跡については、これまでの調査成果から、河川に挟まれた微高地上に集落が営まれていたことが想定されていたが、今回の調査成果はそれを補強するものになると考えられる。また、弥生時代から現代に至るまでの当該地域における土地利用のあり方を考える上で良好な資料を得ることができた。

図22　調査地周辺流路復元図（1：5,000）

表３　遺物観察表

掲載番号	器種	器形	出土遺構	口径（cm）	器高（cm）	色調	備考
1	須恵器	杯	井戸 0277 枠内	13.6	3.6	2.5Y5/1 黄灰	墨書土器「福位」
2	須恵器	椀	井戸 0277 枠内	13.5	3.7	2.5Y5/1 黄灰	墨書土器
3	緑釉陶器	皿	井戸 0277 枠内	13.1	3.2	（釉）2.5GY4/1 暗オリーブ灰（胎土）2.5Y5/2 暗灰黄	輪花皿
4	緑釉陶器	皿	井戸 0277 枠内	13.0	3.4	2.5Y5/1 黄灰	素地　輪花皿
5	緑釉陶器	椀	井戸 0277 枠内	16.8	6.5	2.5Y4/1 黄灰	素地　底部外側突出
6	緑釉陶器	椀	井戸 0277 枠内	16.2	6.5	N6/0 灰	素地　輪花椀
7	黒色土器	椀	井戸 0277 枠内	15.0	4.6	N3/0 暗灰　10YR7/3 にぶい黄橙	
8	黒色土器	椀	井戸 0277 枠内	15.3	4.7	N3/0 暗灰　7.5YR5/3 にぶい褐	
9	土師器	羽釜	井戸 0277 枠内	24.0	(11.3)	10YR8/2 灰白	被熱により赤化・黒色化あり
10	須恵器	風字硯	井戸 0277 枠内	長（10.7）	(3.0)	N6/0 灰	
11	金属製品	鉄斧	井戸 0277 枠内	長 11.1	厚 2.6		木製柄残存　重量 172.7g
12	土師器	皿	井戸 0159	9.7		7.5YR8/4 浅黄橙	
13	土師器	皿	井戸 0159	9.8	1.0	7.5YR8/4 浅黄橙	
14	土師器	皿	ピット 0130	9.6		7.5YR8/4 浅黄橙	
15	土師器	皿	ピット 0205	17.5	(1.8)	5YR7/4 にぶい橙	
16	土師器	皿	ピット 0089	14.7	(5.7)	10YR8/2 灰白	
17	土師器	甕	ピット 0121	24.6	(12.1)	10YR8/2 灰白	煤付着
18	須恵器	杯蓋	ピット 0092	15.8	(2.0)	N4/0 灰～ N8/0 灰白	
19	須恵器	杯Ａ	柱穴 0236	10.3	2.9	N6/0 灰	
20	須恵器	杯蓋	ピット 0255	—	(1.5)	N7/0 灰白	
21	須恵器	杯蓋	ピット 0241	—		N7/0 灰白	
22	須恵器	杯身	ピット 0169	9.1	(2.0)	N5/0 灰	
23	須恵器	杯身	ピット 0156	9.1	(2.0)	N8/0 灰白	
24	須恵器	杯身	ピット 0156	12.3	(2.2)	N7/0 灰白	
25	須恵器	杯身	ピット 0128	—	(2.0)	N7/0 灰白	
26	須恵器	杯身	溝 0263	—	(2.0)	N5/0 灰	
27	須恵器	杯身	柱穴 0069	—	(1.8)	5Y7/1 灰白	
28	須恵器	𤭯	ピット 0066	8.2	(12.3)	N5/0 灰	
29	弥生土器	甕	周濠 0264	—	(5.0)	(内) N3/0 暗灰　(外) 7.5YR7/3 にぶい橙	底部拓本あり
30	弥生土器	甕	周濠 0266	—	(5.3)	7.5YR8/6 浅黄橙	
31	弥生土器	壷	ピット 0217　土坑 0270	26.8	(5.1)	10YR8/2 灰白	口縁内側コブ状突起あり
32	石製品	石包丁	柱穴 0103	長（4.3）	厚 0.7		重量 5.7g

附章　自然科学分析

中久世遺跡出土鉄斧の柄の樹種同定

田中義文（パリノ・サーヴェイ株式会社）・植村明男（株式会社文化財サービス）

１　はじめに

中久世遺跡より出土した鉄斧（掲載番号図 21-11）の柄と考えられる木材の樹種同定を行った結果を報告する。

２　分析試料

試料は井戸 0277 井戸枠内より出土した、袋状鉄斧の袋部分内部に残存する柄に由来するものと考えられる木材１点である。同定精度を高めるために鉄斧の状態を観察した上で、２mm 角程度のブロック状に採取し、分析試料とした。

３　分析方法

ブロック状に採取した試料から木口（横断面）・柾目（放射断面）・板目（接線断面）の３断面を採取する。採取した切片をガム･クロラール（抱水クロラール，アラビアゴム粉末，グリセリン，蒸留水の混合液）で封入し、プレパラートを作製する。生物顕微鏡で木材組織の種類や配列を観察し、観察された特徴を現生標本および独立行政法人森林総合研究所の日本産木材識別データベースと比較して種類（分類群）を同定する。

なお､木材組織の名称や特徴については､島地･伊東（1982)､Wheeler 他（1998)､Richter 他（2006）を参考にする。また､日本産木材の組織配列については､林（1991）や伊東（1995,1996,1997,1998,1999）を参考にする。

４　結果

樹種同定結果（図 23)､コナラ属アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis）に同定された。解剖学的特徴等を記す。

・コナラ属アカガシ亜属（Quercus subgen. Cyclobalanopsis）　ブナ科

放射孔材で、管壁厚は中庸～厚く、横断面では楕円形、単独で放射方向に配列する。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列する。放射組織は同性、単列で１～ 15 細胞高のものと、複合放射組織とがある。

５　考察

カシ類は重硬な木材として知られる。非常に堅く、粘りがあるため、強度・耐久性ともに優れる。このため強度を必要とする鉄斧や鉄鎌の柄等に使われることが多く、今回対象とした試料は鉄斧の柄と考えられ、強度・耐久性を考慮した用材選択といえる。時代の違いはあるが、これま

での中久世遺跡の調査でも多産するが、ほとんどが鋤・鍬等農具に使われる（奈良国立文化財研究所,1993）。

長岡京左京二条二坊六町から出土した古墳末期～平安初期の横斧柄等これまでの調査事例（伊東　2012）や樹種の特徴、遺物の性格等を比較・検討しても今回の結果はこれまでの結果を支持するものといえる。

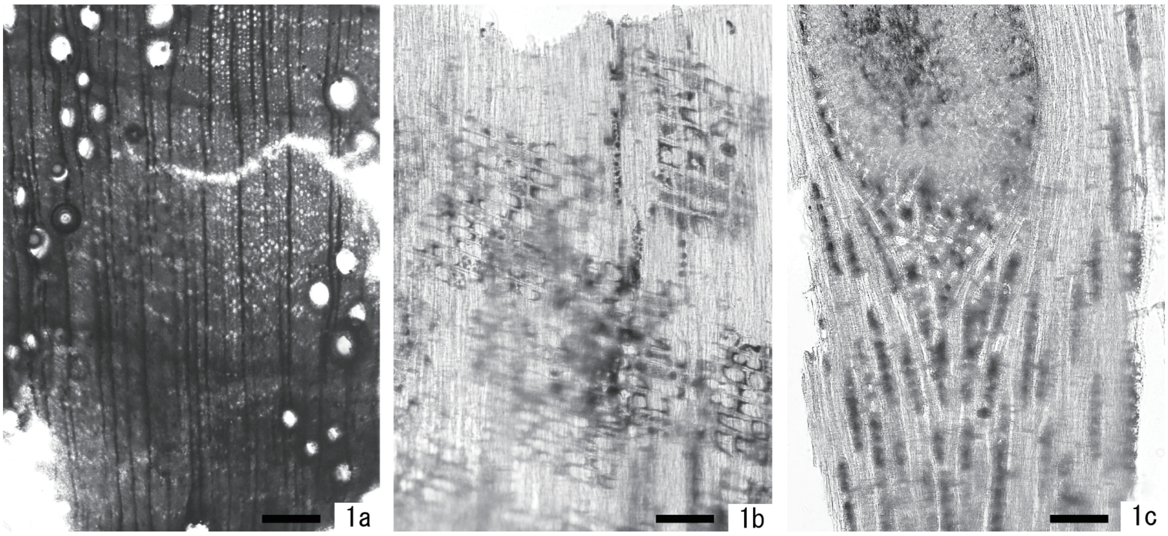


図23　1a：小口　1b：柾目　1c：板目　スケールは100μm

引用文献

林 昭三　　1991『日本産木材　顕微鏡写真集』京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1995「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅰ」『木材研究・資料』31　京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1996「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅱ」『木材研究・資料』32　京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1997「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅲ」『木材研究・資料』33　京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1998「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅳ」『木材研究・資料』34　京都大学木質科学研究所

伊東隆夫　1999「日本産広葉樹材の解剖学的記載Ⅴ」『木材研究・資料』35　京都大学木質科学研究所

Richter H.G.,Grosser D.,Heinz I. and Gasson P.E.（編）　2006『針葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』　伊東隆夫・藤井智之・佐野雄三・安部 久・内海泰弘（日本語版監修）　海青社

島地 謙・伊東隆夫　1982『図説木材組織』　地球社

Wheeler E.A.,Bass P. and Gasson P.E.（編）　1998『広葉樹材の識別　IAWAによる光学顕微鏡的特徴リスト』　伊東隆夫・藤井智之・佐伯 浩（日本語版監修）　海青社

伊東隆夫・山田昌久編　2012『木の考古学　出土木製品用材データベース』　海青社

奈良国立文化財研究所　1993「木器集成図録　近畿原始編」『奈良国立文化財研究所史料』第36冊　奈良国立文化財研究所

図　版

1. 調査区全景(北東から)

2. 井戸0277枠検出状況(東から)

1.　掘立柱建物1（北東から）

2.　溝0263完掘状況（東から）

1. 掘立柱建物3（北東から）

2. 方形周溝墓1（北東から）

1. 方形周溝墓2（東から）

2. 方形周溝墓3（北東から）

1. 方形周溝墓4(東から)

2. 土坑0104遺物出土状況(南から)

図版６　遺物

1. 井戸0277出土遺物

2. 井戸0277出土　墨書土器

3. 井戸0277出土　墨書土器

4. 井戸0277出土　緑釉陶器素地椀

5. 井戸0277出土　風字硯

1. 井戸0277出土 鉄斧

2. 方形周溝墓2出土 石包丁

3. 土坑0104出土 弥生土器

4. 方形周溝墓1、2、土坑0270出土 弥生土器

報 告 書 抄 録

ふりがな	なかくぜいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書　　名	中久世遺跡発掘調査報告書
シリーズ名	
シリーズ番号	
編著者名	辰巳陽一　野地ますみ
編集機関	株式会社 文化財サービス
所在地	〒612-8372 京都市伏見区北端町58
発行所	株式会社 文化財サービス
発行年月日	2019年3月29日

所収遺跡名	所　在　地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
なかくぜいせき 中久世遺跡	きょうとしみなみく 京都市南区 くぜどのしろちょう 久世殿城町 70ばんち 70番地	26100	772	34度 57分 24.8秒	135度 42分 54秒	2018年 12月3日 ～ 2018年 12月28日	319㎡	共同住宅 建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
中久世遺跡	集落	弥生時代	方形周溝墓、土坑	弥生土器	・弥生時代中期の方形周溝墓を検出し、中久世遺跡周辺の集落の広がりを確認した。 ・古墳時代の掘立柱建物の一部及び溝を検出し、当該期の集落の存在を確認した。 ・長岡京期から平安時代の井戸、および掘立柱建物を検出した。 ・中世の耕作溝を検出し、弥生時代から中世に至るまでの中久世遺跡南部における土地利用の変遷が明らかになった。
		古墳時代	溝、掘立柱建物 柱穴	土師器、須恵器	
		長岡京期 ～ 平安時代	掘立柱建物、柱穴 井戸	土師器、須恵器、 黒色土器、緑釉陶器 瓦	
		鎌倉時代以降	耕作溝		

中久世遺跡発掘調査報告書

発行日　　2019年３月29日

　　　　　株式会社　文化財サービス
編　集　　〒612-8372 京都市伏見区北端町58
　　　　　TEL 075-611-5800

　　　　　三星商事印刷株式会社
印　刷　　〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下る
　　　　　TEL 075-256-0961